

## ウィーンのおペレッタ 2

ヨハン・シュトラウスのオペレッタ：「ヴェネチアの一夜」、  
「ジプシー男爵」、および「ウィーン気質」について

客員研究員 増 田 芳 雄

### 目次

#### はじめに

#### I. 「ヴェネチアの一夜」

1. 「ヴェネチアの一夜」の台本と作曲
2. 「ヴェネチアの一夜」の歴史的背景
3. 「ヴェネチアの一夜」のストーリー
4. 「ヴェネチアの一夜」の音楽

#### II. 「ジプシー男爵」

1. 「ジプシー男爵」の時代とオスマン・トルコ
2. ジプシーについて
3. 「ジプシー男爵」のストーリーと音楽
4. 「ジプシー男爵」の演奏

#### III. 「ウィーン気質」

1. 「ウィーン気質」の誕生
2. 「ウィーン気質」のストーリー
3. 「ウィーン気質」の音楽

#### むすび

#### 引用文献

#### はじめに

本稿執筆の1999年はヨハン・シュトラウス（1825-1899）の没後100年に当たり、ウィーンではシュトラウスにちなんだ展覧会や演奏会など数々の催しが開かれたと聞く。筆者は残念ながらこの年にウィーンを訪れる機会を得なかったが、同地の友人が展覧会の展示品などを纏めた一冊（Ausstellung, unter Donner und Blitz）を送ってくれた（図1）。ウィーンで活躍した大作曲家たちは多いが、ヨハン・シュトラウスはウィーンの大衆に大変親しまれていることがよくわかる。ちなみにこの1999年は父ヨハン・シュトラウス（1804-1849）の没後150年にも当たる。また、1999年はこの父子とは姻戚関係はないが、ミュンヘン出身の作曲家リヒャルト・シュトラウス（Richard Strauss, 1864-1949）の没後50年でもあり、ミュンヘンなどで彼のオペラがよく上演された。

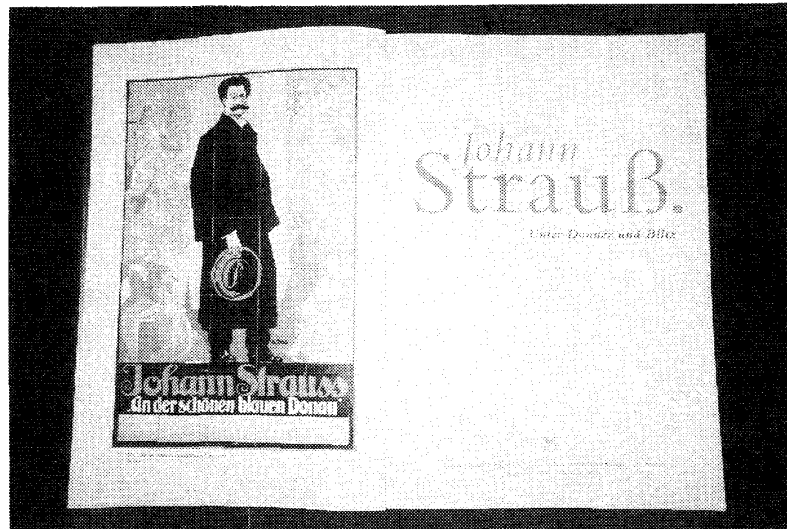


図1. 1999年5月6日から9月26日までシュトラウス没後100年を記念してウィーン歴史博物館 (Historisches Museum)で開かれたシュトラウス記念展覧会(Sonderausstellung)の案内書 (Johann Strauß. Unter Donner und Blitz)。

ヨハン・シュトラウス (Johann Strauss) は、ワルツ王と呼ばれるに相応しく、19世紀の4分の3 (ワルツの3/4拍子) を生き、その生涯に500曲近いワルツやポルカを作曲した。また、大半は失敗作ではあったが、16曲ものオペレッタも作曲した。その死後、彼の美しいワルツやポルカを集めて「ウィーン気質」がオペレッタにまとめられたから、シュトラウスの作ったオペレッタは16+1曲ともいえる (表1, 増田芳雄, 1998)。シュトラウスは19世紀、音楽の都ウィーンにおける類い希な天才だったのであろう。

表1. ヨハン・シュトラウス2世のオペレッタ作品

作曲年	題名
1. 1871	インディゴと40人の盗賊 (Indogo und vierzig Räuber)
2. 1873	ローマの謝肉祭 (Carnival in Rom)
3. 1874	こうもり (Die Fledermaus)
4. 1875	ウィーンのカリオストロ (Cagliostro in Wien)
5. 1877	メトウザレム王子 (Prinz Methusalem)
6. 1878	鬼ごっこ (Blindekuh)
7. 1889	女王のレースのハンカチーフ (Das Spitzentuch der Königin)
8. 1881	愉快的な戦争 (Der lustige Krieg)*
9. 1883	ヴェネチアの一夜 (Eine Nacht in Venedig)
10. 1885	ジプシー男爵 (Der Zigeunerbaron)
11. 1887	ジンプリツイウス (Simplicius)**
12. 1892	騎士パースマン (Ritter Pásman)
13. 1893	ニネットタ姫 (Fürstin Ninetta)
14. 1894	ヤーブカ (Jabuka, das Apfelfest)
15. 1895	くるまば草 (Waldmeister)
16. 1897	理性の女神 (Die Göttin der Vernunft)
+ 1. 1899	ウィーン気質 (Wienerblut)

\* 1999年暮にNHKFM放送で全曲放送(ウィーン・コンツェルトハウスにおいて演奏会形式で演奏された)

\*\* 2000年1月NHKBSTVで全曲放映(最近楽譜が発見され、チューリヒで演奏された)

ワルツ王ヨハン・シュトラウスは生涯に16のオペレッタを作曲し、その内「こうもり」(Die Fledermaus)と「ジプシー男爵」(Der Zigeunerbaron)はウィーンのフォルクスオーパーにおける最近の上演数ベスト5に入っている。また、第17番目に当たる「ウィーン気質」(Wienerblut)もベスト5に入っている。シュトラウスの残りのオペレッタはほとんどすべて不成功で、現在全曲が演奏されるものはほとんどないが、一つだけ特異な存在ともいえるオペレッタがある。それは「ヴェネチアの一夜」(Eine Nacht in Venedig)で、このオペレッタは現在でもときに上演される。そこで、本稿では前報の「こうもり」に引き続き、「ヴェネチアの一夜」について論じ、さらに成功作である「ジプシー男爵」そして「ウィーン気質」を取り上げて考察したい。

## I. 「ヴェネチアの一夜」

「こうもり」については前報ですでに考察したが、それは「こうもり」がシュトラウスの最高傑作であるばかりでなく、ウィーン・オペレッタの代表であるからであった。今回シリーズ第2回として、最初にまず「ヴェネチアの一夜」をとりあげたのは、このオペレッタが他と比べ、以下に述べるように、台本、音楽において極めてユニークな自由度をもった作品であるからである。劇場演奏、レコード等において、このオペレッタで演奏されるアリアが異なった登場人物によって歌われたり、台本にないアリアが入ったりすることに筆者はかねてから疑問を持っていた。資料を調べたり、オーストリアやドイツの友人たちに演奏による違いの理由を訊ねたりしていた。その結果、このオペレッタには幾つかの異なった台本の改変があり、演奏者（指揮者）の、いわば好みによって自由に演奏されるのが特徴であることがわかった。

「こうもり」ほど頻繁には上演されないので筆者もこの「ヴェネチアの一夜」をウィーン・フォルクスオーパーで1回、大阪で公演したミュンヘン・ゲルトナープラッツ国立劇場の上演を1回見ただけで、あとはレコード3種類とレーザーディスクの合計6種類の演奏を知るだけである。音楽そのものは極めて美しく、オペレッタとして大変楽しめるが、これらがそれぞれ部分的にかなり異なった演奏をしているので、比較しながらこの特異なオペレッタの解析を試みたい。

### 1. 「ヴェネチアの一夜」の台本と作曲

シュトラウスの作曲したオペレッタは表1に示すように合計16曲である。これらのうち、序曲（インディゴ、ローマの謝肉祭、メトウザレム王子、くるまば草など）やその他、一部の曲（ウィーンのカリオストロ、女王のレース、騎士パスマンなど）が演奏されるものもあるが、全曲が上演されるものは、筆者の知る限り、3番目の「こうもり」、9番目のヴェネチアの一夜、10番目の「ジプシー男爵」、それにシュトラウスの死後上演された「ウィーン気質」くらいである。しかし、1972年から1987年までのウィーン・フォルクスオーパーで上演されたオペレッタベスト5には「こうもり」(第1位)、「ウィーン気質」(第2位)、「ジプシー男爵」(第5位)は入るが(渡辺忠雄, 1990; Masuda and Hübl, 1997)、「ヴェネチアの一夜」はこの中に入らない。それでも、この15年間、61回の公演を重ねている（「こうもり」は259回）のでこ

のオペレッタの人気はかなり高いと思われる。

シュトラウスは数々の失敗作のあと、9番目のオペレッタとしても「ヴェネチアの一夜」を作曲したが、その初演はウィーンでなくドイツのベルリンにおいてであった。モーツァルトが父とイタリアに滞在し、交響曲第9番を作曲したり、イタリアを舞台にしたオペラを作るなど、音楽家だけでなく、ゲーテをはじめとするドイツ、オーストリアの芸術家たちが南の國イタリアに憧れをもっていたように、シュトラウスもイタリアに並々ならぬ関心を持っていた。1874年のイタリア旅行からワルツ「シトロンの花咲くところ」(Wo die Citronenn blüh'n, Op. 364)の発想を得、また「ローマの謝肉祭」(Carneval in Rom)、「陽気な戦争」(Der lustige Krieg)などイタリアを舞台にしたオペレッタを書いた。

シュトラウスの他のオペレッタ同様、この「ヴェネチアの一夜」も脚本家ツェルとジュネー(F. Zell, R. Genée)の台本を用いて作曲したが、それにはイタリアに対するシュトラウスの憧れのほか、次のような理由があった。すなわち、彼らの台本がその当時2種類あり、一つは「ヴェネチアの一夜」でもう一つは「乞食学生」(Der Bettelstudent)であった。当時、シュトラウスより年少の新進オペレッタ作曲家ミレッカー(Carl Millöcker, 1842-1899)も彼らの台本を用いて新しいオペレッタを作曲しようとしていた。2つのうち、ミレッカーが「乞食学生」を選んだので、シュトラウスは「ヴェネチアの一夜」をとることになった。ミレッカーの「乞食学生」(1882)は空前のヒットとなり、現在でもウィーン・フォルクスオーパーでは「こうもり」、「ウィーン気質」について第3位の上演回数を誇っている(第4位はツェラー |C. Zeller, 1842-1898|の「小鳥売り」|Die Vogelhändler|)。

本来、他のオペレッタ同様、シュトラウスはこのオペレッタもウィーンの“アン・デア・ウィーン劇場”(Theater an der Wien)で初演する計画であった。しかし、彼の2番目の妻リリー(Lily, Angelica Dittrich)が1882年、アン・デア・ウィーン劇場支配人でシュトラウスの友でもあるシュタイナー(Franz Steiner)と不倫のあげく彼のもとへ走るというスキャンダルを引き起こした。このため、シュトラウスはリリーと離婚し、31歳年下のアデーレと結婚したいと考えた。しかし、カトリックの國オーストリアでは、リリーが生きている限りシュトラウスは再婚できなかった。そこで彼はオーストリア国籍を離脱し、ドイツの小国であるザクセン・コーブルク・ゴータ公国(Herzogtum Sachsen-Coburg und Gotha)の国籍を得、プロテスタンに改宗し、1887年コーブルクでアデーレと正式に結婚した(渡辺忠雄, 1984)。

このようないきさつで、シュトラウスはこのオペレッタのウィーン初演を諦め、1883年10月3日にベルリンのフリートリッヒ・ウィルヘルムシュタット劇場(Friedrich Wilhelmstädtischen Theaters zu Berlin)で初演した。しかし、結果は不評であった。伝えられるところでは、有名な「入江のワルツ」の歌詞はなぜか“夜には猫は皆灰色に見える…”(Nachts sind die Katzen grau)という陳腐なもので\*(Wurz, 1980)、ベルリンの聴衆はこれを嘲ったという。

{\*註：日本のことわざにすると、“闇夜にカラス”と同義。このドイツ語表現に関し、ご教示頂いた橋木郁子氏にお礼申し上げます}

フリッチェ(Julius Fritsche)支配人の下でこのベルリンの劇場はとくにオペレッタ上演劇

場として全ドイツでは最高の評価を得ていた。フィリッチェはシュトラウスのオペレッタを格別に好み、この劇場ではウィーンの劇場よりも常にロングランを重ねていた。この時期、「愉快な戦争」が大ヒットで上演を重ねていたが、惜しくも契約上演数に達したので、フィリッチェは別のオペレッタを探さなくてはならなかった。この劇場はベルリン郊外にあり、市の中心から離れていたが、フリッチェはこの機会に劇場の内外を改装し、ベルリンを代表するに相応しいものとした。ここでフリッチェはシュトラウス自らベルリンで新しいオペレッタを指揮するという契約を1883年9月15日に行い、10月3日の初演となった。

若干の手直しの上、幸い同年10月9日にアン・デア・ウィーン劇場でも上演され、空前の成功をおさめ、以後44回連続公演をした（白石隆生、1975）。このとき、「入江のワルツ」（Lagunen Walzer, Op.411、独立にも演奏される）は原台本に戻り、歌詞は以下ようになった（英訳はツェルとジュネニーのピアノ・ヴォーカル・スコアによる）：

Ach, wie so herrlich zu schau	Woman I cannot understand
Sind all die reizenden Frauen,	she gives her heart and her hand
Doch willst du einer vertraun,	You build the home that you planned,
Dann, Freundchen, auf Sand wirst du baun!	Then find that you have built it on sand.
Rasch, wie die Wellen entfliehn,	You may as well be resigned,
Fluchtig, wie Wolken dort ziehn,	some day you are certain to find
Treibt ihr beweglicher Sinn	woman is gentle and kind
.....	.....

その後、このオペレッタは多くの変化を受け、指揮者、脚本家によってかなり自由に改変されてきたという。レクラムの「オペレッタガイド」（Wurz, 1969）によると、その改変版は11種類もあるという（Barth, 1976）。例えば、ハーゲマン（Hagemann, 1918）、コルンゴルト・マリシュカ（Korngold/Marischka, 1931）、ケデンフェルト・トウタイン（Quedenfeld/Tutein, 1935）、フェルゼンシュタイン（Felsenstein, 1954）などである。「ヴェネチアの一夜」にこのような改変がしばしば行われたことには理由があるらしい。第1は演奏上の理由で、演奏者の技量などにより、楽器を指定のものから他の楽器に代えることなどは通常行われていた。第2の、もっと重要な理由は、その時代の好みや流行に合わせるための改変であった。こうして、「ヴェネチアの一夜」は指揮者、オーケストラによって数々の改変を受けてきたが、ただ一人、クレメンス・クラウス（Clemens Krauss）だけはその他の有力な音楽家同様、オリジナルにこだわった。

本来、シュトラウスのオペレッタはすべてピアノ用スコアで、最初のオーケストラ・スコアはシュトラウス自身が1883年10月9日にウィーンで初演に用いたものがあっただけであった。そのごく少数のコピーがハンブルクのクランツ（Cranz）楽譜店に残っていたが、それを手に入れるのは容易でなかったという（Barth, 1976）。事実、筆者がウィーンのドプリンガー（Doblinger）でいろいろなオペレッタのスコアを買おうとしても、「こうもり」以外のものは「ヴェネチアの一夜」を含め、すべてピアノ・スコアであった。本稿で紹介する「ヴェネチアの一夜」のうち、筆者が観た2つの上演、所持する3種類のレコードとレーザーディスクの演

奏はそれぞれかなり異なる。それは、例えば序曲の演奏など、演奏される音楽だけでなく、ストーリーも多少改変してある。たとえば、上記の有名なアリア「入江のワルツ (Lagunen Walzer)」や「いとしい人、ゴンドラへお乗り (Komm' in die Gondel)」を歌う人物が違ったり、あるいは台本にない曲が付け加えられる、などが目につく。

## 2. 「ヴェネチアの一夜」の歴史的背景

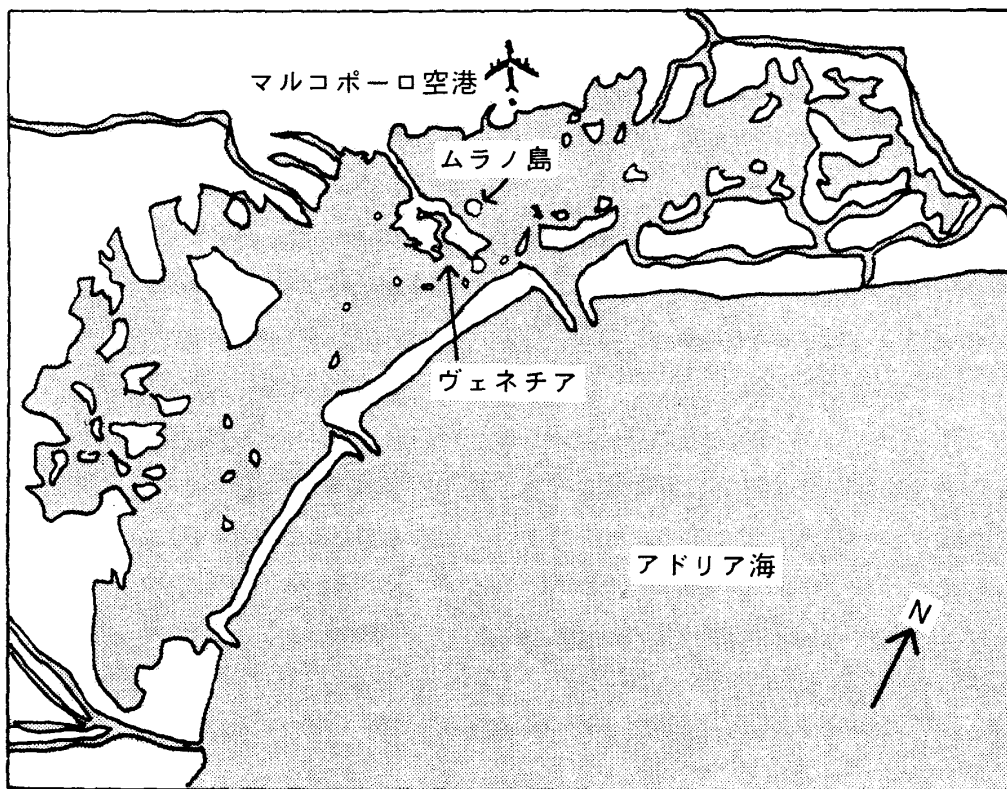


図2. ヴェネチアのラグーネ (Lagune, 入り江)。

まず、「ヴェネチアの一夜」の地理的そして時代背景を見てみよう。この町はイタリアの北東部、アドリア海 (Adria) の北、ヴェネチア湾の西に広がるラグーナ (入江、Lagune) を控えたヴェネチア洲の首都であり、大小約120の島をつなぎ合わせる運河からなった特異な都市である (図2)。空港 (マルコ・ポーロ、Marco Polo) は本土側にあり、市との連絡は船によっている。列車は本土から市内に入るが、駅 (サンタ・ルチア駅、Santa Lucia) から市の中心部へもタクシーと称する船を利用するのが一般である (図3)。ヴェネチア市を取り巻く入江は

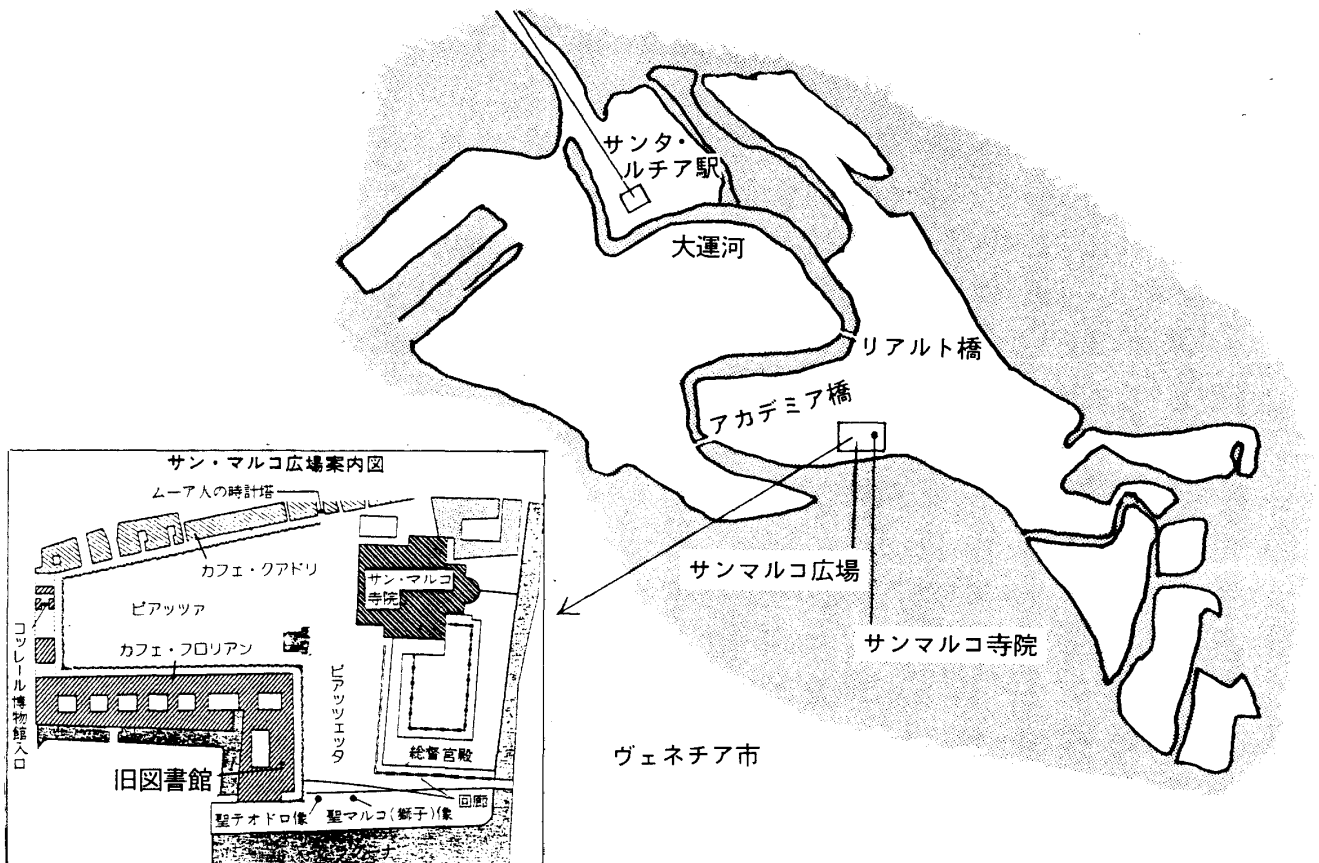


図3. ヴェネチア市とサン・マルコ広場。

この有名な観光都市に特異な風景を与えているが、石造りの建物からなる都市全体は年々、かなりの速度で沈下しているとのことで、あと何年保つのかと話題になっているという。このため、大陸側における地下水の汲み上げを禁止してから、沈下現象は納まりつつあるそうであるが、時に高潮に襲来され、サン・マルコ広場が水浸しになることもある（陣内秀信、1992）。市内は車の行き来はなく、市全体が歩行者天国のようで、道は多くの運河や橋で結ばれている。

この水の都ヴェネチアは中世以来18世紀まで、ヴェネチア共和国として発展した。共和国は貴族の間から選ばれた総督によって統治されており、10世紀以来東地中海と西ヨーロッパを結ぶ東方貿易を独占して繁栄した。しかし、15世紀終わりのインド航路発見以来その貿易の意義が薄れ始め、ヴェネチアは衰退に向かった。1799年には共和国はナポレオンに征服され、やがてオーストリアに併合された。現在でも、ヴェネチア近くのパルマ（Parma）にはナポレオンの后となった（ナポレオン2世を生んだ）ハプスブルク家の皇妃マリー・ルイーゼ（Marie-Louise）がナポレオン死後に余生を送った宮殿が残っている。ヴェネチアは1866年プロシャ・

オーストリア戦争の際プロシヤと同盟し、プロシヤが勝ったため、ヴェネチア地方はこの戦争の後オーストリアからイタリアに割譲され、統一国家イタリアの領地となった。ヴェネチア、トリエステ、あるいはこのあたりの北イタリアがもともとオーストリアと近い関係にあるのはこのような歴史的背景によっている。

シュトラウスが「ヴェネチアの一夜」を作曲した1881年はプロシヤ・オーストリア戦争にオーストリアが敗れ（1868）、プロシヤによってドイツは統一され（1871）、かつてのハプスブルク帝国が衰退の途をとっている時で、フランツ・ヨーゼフ皇帝の治下にあった。帝国は政治的に力を失い、いわゆる世紀末の芸術が現れようとしていた。おそらく、かつての栄光を懐かしむ空気もあり、オーストリア領北イタリアに対する親近感も残っていたのであろうか。

このオペレッタの舞台となった時代のヴェネチアはヴェネチア共和国の末期にあたり、フランス革命、ナポレオン時代の前になる。当時、ヴェネチアの貿易は衰退し、この水の都はもっぱら文化や芸術、そしてカーニバルなど享樂の中心地になっていた。14世紀のフィレンツェを舞台にしたズッペ（Franz von Suppe, 1819-1895）のオペレッタ「ボッカチオ」（Boccaccio）に相通じる雰囲気がある。なお、1879年にウィーンのカール劇場で初演された「ボッカチオ」の台本は、「ヴェネチアの一夜」と同じくツェルとジュネーによっていた。

1985年、ドイツで開かれた会議の帰途、筆者と家族、研究室の仲間はウィーンからヴェネチアを訪ねた。それはもともと、「ヴェネチアの一夜」を目の当たりに見てみたいという筆者の動機からであった。当時の旅行日記には以下のように記してある。

“9月4日 晴れ一曇り。タクシーでウィーン南駅へ。7時55分発、列車は途中山道を横切り国境を過ぎてイタリアへ。17時にヴェネチア（サンタ・ルチア駅）に着く。目の前が運河で様子がさっぱりわからない。両替ののち、ホテルの人が見付き、水上タクシー（モーターボート）でホテル”ヨーロッパ・レギーナ“の324号室へ。通貨の単位が大きく、戸惑う。たとえばタクシーは55000+1000リラ（約7000円）。暫くして出かけ、サン・マルコ広場近くのレストランで夕食をとる。町は道が狭く、至る所運河で（図4）、我々の知る大都会とは風情が全く

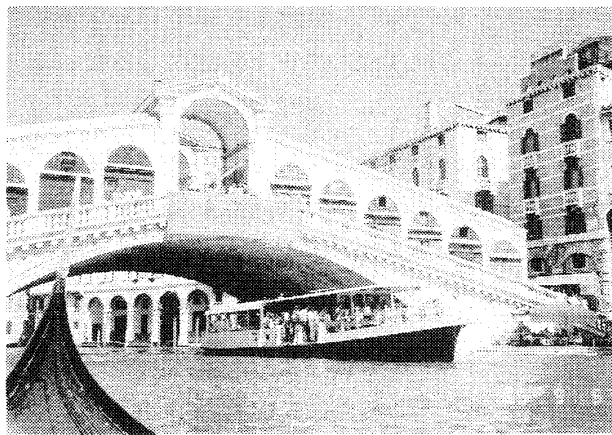


図4. ヴェネチアの運河とこれにかかる著名なリアルト橋（Ponte di Rialto）（筆者写す）。



違う。その代わり、町に車はなく、雑踏以外は実に静かである。前菜、スパゲッティ、ブイヤベース、などをとるが大変うまい。1人前3000リラ余。桁が違うので解りにくい。帰りにはサン・マルコ広場でアイスクリーム、コーヒーと音楽を一同で楽しみ、踊り、帰って神阪君と（註：盛一郎、市大研究室の同僚、現教授）スリヴォヴィッチ（註：オーストリア・ユーゴの酒）を飲んで寝る。

9月5日 快晴。よく眠った。8時に朝食、9時に出かけ、まずサン・マルコ寺院へ。さすがに大変立派なモザイクに満ちた大伽藍だ。次ぎにパラッツォ・ドウカーレ（博物館）へ。興味ある展示品のなかに貞操帯などもある。ピッツアの昼食後ゴンドラに乗って運河を巡る（図5）。



図5. 運河を行くゴンドラ（筆者写す）。

途中モーツァルトやマルコ・ポーロの家に寄る。町全体が沈下しつつあるようで、このままではこの美しい町はいつまで保つのであろうか。一旦ホテルに帰り、一服して風呂を浴び、一同ニメア（レストラン）へ食事に行く。魚料理ばかり食べて満足する。帰りにまたサン・マルコ広場に行き、ビールと音楽を楽しむ。楽隊が西谷君（註：和彦、当時大学院学生、現東北大学理学部教授）がリクエストして、「ヴェネチアの一夜」序曲を演奏してもらう。

9月6日 曇りのち晴れ。朝食後サン・マルコ広場（図3, 6）へ散歩に行く。女性軍は買い物。チェックアウトし、12時の船で空港へ。（以下略）“

こうして、筆者は「ヴェネチアの一夜」の舞台を垣間見ることができた。

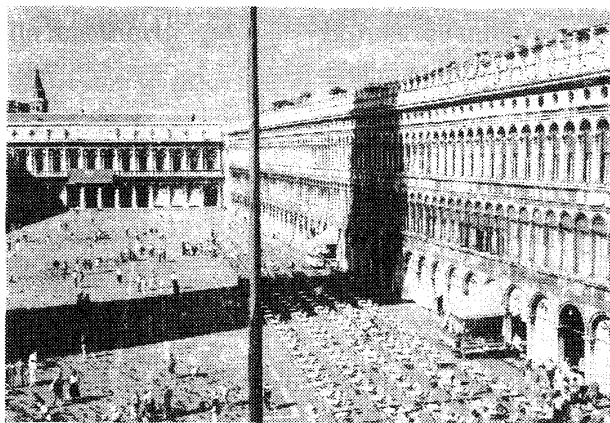


図6. サン・マルコ大聖堂（Basilica di San Marco）から見下ろしたサン・マルコ広場（Piazza San Marco）（筆者写す）

## 3. 「ヴェネチアの一夜」のストーリー

登場人物は表2のとおりであるが、その中心はウルビーノ侯爵ギュード (Guido, Herzog von Urbino) である。かれは“カサノヴァ”的人物で、モーツァルトのドン・ジョヴァンニやヴェルディーのリゴレットのアルマビーバ伯爵、などを混ぜ合わせた役柄と言えよう。以下、ツェルとジュネーの台本 (Wurz, 1980)、シュトラウスの作曲によるピアノ・スコア (表3参照) にしたがってストーリーを略記したい。( ) 内の数字はピアノ・スコアによる楽譜番号。

表2. 「ヴェネチアの一夜」登場人物の相互関係

ギュード伯爵

(Guido, Herzog von Urbino)

デラックワ (市参議会議員)

(Delacqua, Bartolomeo)

カラメロ (ギュードの従者で床屋)

(Caramello)

パパコーダ (マカロニ料理人)

(Pappacoda)

エンリコ (デラックワの甥、海軍士官、

(Enrico) バルバラの恋人) \*

バルバラ (デラックワの妻)

(Barbara)

アンニーナ (バルバラの妹で魚売り、

(Annnina) カラメロの恋人)

チボレッタ (バルバラの侍女、

(Ciboletta) パパコーダの恋人)

コンスタンチア (侯爵の貴婦人) \*

(Constantia)

その他市参議会議員と彼らの妻たち2組：バルバルッチオと妻アグリコーラ、テスタッチオと妻コンスタンチア；S. Barbaruccio+Agricola, G. Testaccio+Constantia)

\* 台本によっては登場しないことがある

表3. ツェル・ジュネー台本と、シュトラウスの音楽によるピアノ・スコアの楽譜番号 (日本語訳は白石隆生による)

Overture	序曲
1 Akt	第1幕
1.Introduction und Couplet "Wenn von Lido sacht"	リドから穏やかな涼しい風が (合唱、パパコーダ)
2.Auftrittslied der Annina "Frutti di Mare"	アンニーナの登場、"海の幸"
3.Duettino "s ist wahr, ich bin nicht allzu klug"	結婚したら嬉しいわ (チボレッタ、パパコーダ)
4.Auftritt des Caramello "Evviva Caramello"	カラメロの登場、"カラメロ万歳"
5.Duett "Annina! Caramello!"	2重傷 (アンニーナ、カラメロ)
6.Quartett "Alle maskiert"	4重唱 "みんな仮面をつけて" (合唱)
61/2.Auftritt des Herzogs "Sei mir gegrüsst, du holdes Venetia"	侯爵の登場 "私に挨拶を！聖なるヴェネチアよ "
7.Finale I "Hier ward es still"	"静かになった、この機会を" (侯爵、アンニーナ)
"Komm' in die Gondel"	"ゴンドラへお乗り、いとしい人よ "(カラメロまたは侯爵)
"Mit der Würde, die dir eigen"	セレナーデ (合唱)

2 Akt	第 2 幕
Entre-Acte	
8.Introduction und Couplet “Venedigs Frauen führen”	導入 “さあ遠慮なく入りましょ (侯爵とふじんたち)
81/2.Abgang “So ängstlich sind wir nicht”	4 重唱 (夫人たち)
9.Lied “Treu sein, das liegt mir nicht”	“愛らしい夫人たち” (侯爵)
10a.Duettino “Hör’ mich Annina”	2 重唱 (カラメロ、アンニーナ)
10b.Duettino “Sie sagten meinem Liebesfleh’n”	“やっと 2 人になれた” (侯爵、アンニーナ)
11.Ensemble und Couplet “Solch ein Wirtshaus lob’ ich mir”	“こんな飲み食いの場がお気に入り (パパコーダ、カラメロ)
12.Quartett “Ninana, Ninana, hier will ich singen”	フィナーレ、他の者はあちらで踊らせておこう (侯爵ら)
Finale II. “Lasset die andern tanzen da”	楽しい催しの時間だ (合唱)
“Horch von San Marco der Glocken Gelaut”	
13. Akt	第 3 幕
Intoroduction und Taubenszene “Carneval ruft euch Zum Ball	導入
Lagunen-Walzer “Ach, wie so herrlich zu schau’n”	入江のワルツ (侯爵、カラメロ)
15a.”Die Tauben von San Marco”	サン・マルコ寺院の鳩 (カラメロ、アンニーナ)
16.Duettino “Take, take,tak, erst hack’ ich fein”	何よりも (合唱)
16a.Intermesso	インターメッツォ
17.Aufzugsmarsch und Finale “Wie sich’s gebührt”	フィナーレ (合唱)

序曲ののち、{第 1 幕} 時は 18 世紀半ば、舞台は水の都ヴェネチアで、年に一度のカーニヴァルの時期が来る。この時期に毎年女たらしのギュード侯爵がヴェネチアへやってきて美女を漁る。去年から市参議会議員のデラックワの若い妻バルバラに目をつけている。しかし、バルバラはデラックワの甥で海軍士官のエシリコと恋仲である。

町の市場ではマカロニ料理人のパパコーダが腕自慢をしている(1)：

Ihr Venetianer hört, was Papacoda werth!	Good people gather near, for
	Pappacoda's here!

.....

.....

そこへ近くの村から魚売りのアンニーナが船に積んだ新鮮な海の幸を売りに広場へやってくる(2)。彼女は誕生日を翌日に控えたデラックワのために新鮮なカキなどを持参する。：

Frutti di mare,frutti di mare!	Fresh from the ocean!
Kommt und kauft, kommt und kauft.	Come who'll buy,
Ich mom' von Chioggia zu Euch über's Meer,	I bring you a harvest of good things to
	eat.

.....

.....

バルバラの侍女であるチボレッタがやってきて恋人のパパコーダに早く結婚しようとせがむが、彼は侯爵専属の料理人のような就職口が見つかったら結婚しようと言う(3)。この(2)と(3)

は逆の順で演奏されることが多い。パパコーダの友人で侯爵の理髪師であるカラメロが登場し、ギュード侯爵が来ることを告げる(4)。侯爵と理髪師の組み合わせはモーツァルトの「フィガロの結婚」や「ドン・ジョヴァンニ」そのものである。この理髪師カラメロと魚売りアンニーナは恋人同士である(5)。この2組のペアはカーニバルには全員仮面・仮装で出かけようと盛り上がる(6)。女たらしの侯爵が来ることを知った市参議会議員のデラックワは妻がカーニバルへ行かぬよう、彼女をムラノ島（ヴェネチア・ガラスで有名）の修道院へ隠し、代わりに侍女のチボレッタを妻と偽ってカーニバルへ連れて行くことにする。しかし、バルバラはこの機会に甥のエンリコと逢い引をしようとし、妹の魚売りアンニーナに身代わりに仮面をつけてゴンドラに乗って貰うように頼む。いよいよ侯爵が登場し(6・1/2)、フィナーレとなり、侯爵は静かになった機会をバルバラとの逢い引きに利用しよう、と歌う：

Sei mir gegrüsst du holdes Venetia,	Dear city of dreams, enchanted you hold me,
Ich stehe träumend da dir so nah!	With you no Paradise can compare.
Zur Liebe dich Natur erkör,	Beneath your stars that gleam above,
In deinen Mauern wohnt das Gluck,	within your walls I will dream again,
..... . .	..... . .

侯爵の命令でカラメロはバルバラが自分の恋人アンニーナに入れ替わったとも知らず、“いとしい人、ゴンドラへお乗り”と有名なゴンドラの歌を歌う(7) (図7)：



CH. V. SCH.

図7. 「ヴェネチアの一夜」第1幕“いとしい人、ゴンドラへ”の場面の影絵。自分の恋人アンニーナがバルバラの替え玉になったとも知らず、カラメロはバルバラと思ってゴンドラへ誘う(Christl Schwindの劇場影絵)。

Komm' in die Gondel, mein Liebchen!	Love, I am here in my gondola
O steige nur ein,	waiting below
Allzu lang schon fahr ich trauernd so ganz allein!	With a sweet and tender passion
·	My heart's a glow,
Hab' ich an Bord dich, dann stosse ich freudig	Evening is still but the breezes
von Land,	are sighing of love,
Führe eilig dich hinüber zum schönen Strand,	and the clouds are softly veiling
	Stars above,,
Der dort lockend winkt,	on this lovely night
Fern im Mondlicht blinkt;	made for love's delight;
.....	.....

こうして、カラメロはバルバラを乗せるはずのゴンドラの船頭を買収し、自分が船頭になり、仮面をつけてゴンドラに乗っているアンニーナをバルバラと思って彼女を侯爵のところへ連れてくる。こうして話はこじれる。

〔第2幕〕賑やかにカーニヴァルが開かれ参議会議員の夫人たちが侯爵に会いたいとやって来る(8)。侯爵は応じて歌う(9)。自分が連れてきた女性がバルバラでなく自分の恋人アンニーナであることを知ってカラメロは驚き、事情を訊く(10a)。彼女をバルバラと思っている侯爵にアンニーナがコケティッシュに振る舞うので(10b)、カラメロは気が気ではない。友人同士のカラメロとパパコーダが会い、このような飲み食いの場所は気に入ったと歌う(11)。そこへ、市参議会議員のデラックワが妻と偽って侍女のチボレッタを連れてやって来る。侯爵、デラックワ、チボレッタ、アンニーナがいい気分でニナナと歌う(12)。チボレッタはデラックワの妻という自分の役割を忘れ、恋人パパコーダのために料理人の地位を彼のために得ようと侯爵に一生懸命に頼む。侯爵は承知し、皆あちらで踊らせようと歌う。真夜中になり、一同はサン・マルコ広場に向かい、フィナーレとなる(13)：

Alle maskiert, alle maskiert,	Just for today let us be gay,
Wo spass, wo Tollheit und Lust regiert.	We'll dance and sing all our cares away.
Ganz ungeniert alle maskiert,	Just for today work turns to play,
Cospetto, wie amusant das wird!	Tonight King Carnival holds his sway!
.....	.....

〔第3幕〕サン・マルコ広場の鳩のかわいいくちばしよとアンニーナとチボレッタにことよせて侯爵が歌う(14)。次ぎに「入江のワルツ」を侯爵(あるいは台本によってはカラメロ)が夫人たちを称えて歌う(15)。また、アンニーナとチボレッタもサン・マルコ広場の鳩を称える(15a)。バルバラがムラノ島へ行っていないことをデラックワは知り、妻を捜す。バルバラはカーニヴァルで甥のエンリコと楽しんでしたが、夫には、誘拐されかかったところをエンリコに助けられた、という。すべての真実を知った侯爵は、カラメロを土地の管理人に、パパコーダを料理人に、それぞれ取り立て、それぞれアンニーナ、チボレッタと結婚できるようにする。

ここでパパコーダとチボレッタは喜んで歌う(16)。カラメロを自分の土地管理人にすれば、今やアンニーナが気に入った侯爵はカラメロの妻となる彼女を近くに置くことが出来る。こうして侯爵は帰路に就いてフィナーレとなる(17)：

Wie sich's gebührt, hat es gespürt,	Just for today let us be gay,
Dass ganz umsonst er sich e chauffirt.	We'll sing and dance all our cares away.
Wo Lust regiert, Scherz commmandiert,	Just for today work turns to play,
Cospetto! Wird man leicht angeführt!	Tonight King Carnival holds his sway!
.....	.....

台本では、第1幕のはじめに海軍士官で、デラックワの甥エンリコが登場するが、バルバラが留守だったので、やむなくエンリコはカーニヴァルで逢い引きするため、パパコーダにバルバラ宛の手紙を託す。また、演奏によってはこの場面でエンリコがバルバラの窓の下でセレナーデ“イタリアは太陽の國…(In Italien heissen Sonnenland…)”と歌う。このようなわけで、夫婦や恋人同士が、女たらしの侯爵の登場で波乱に満ちたカーニヴァルを楽しむが、結局はめでたく納まるどころへ納まる、というストーリーである。

このオペレッタの舞台はヴェネチアのカーニヴァル (Karneval) である。そこで、それぞれの幕の終わりとおペレッタのフィナーレでは「みな仮面をつけて行くんだ」(Alle maskiert) で締めくくっている。

Alle maskiert, Alle maskiert,	All through the night till it is light,
Cospetto! Wie amusant das wird!	We'll dance and sing till the dawn is Bright
In der Menge buntem Gedränge	Life is waiting while we're debating,
Sich verstecken und nekken,	why keep on hesitating?
Hier entweichen, dort erreichen,	night is falling, love is calling,
.....	.....

カーニヴァルはリオのものが世界的に有名であるが、もともとカトリック教徒のお祭りで、4月の復活祭 (Ostern) までの、日曜日を除く40日と定められたキリスト教会暦の精進の季節である「四旬節」(Lenz) 直前3日から1週間の行事、ということになっている。四旬節には肉を断ち、懺悔が行われるので、その前に肉を食べて楽しく遊ぼうというのがカーニヴァルで、ローマ時代に起源をもつといわれる。その頃からカーニヴァルでは身分を忘れ、皆が同等に楽しむため仮装行列をしたらしい。

#### 4. 「ヴェネチアの一夜」の音楽

このオペレッタの音楽は、他のシュトラウスのオペレッタのそれ、あるいはワルツやポルカと同様、大変美しい。なかでも序曲や上に歌詞を紹介した“ゴンドラへお乗り、いとしい人”と“入江のワルツ”は有名である。私が観たフォルクスオーパーとミュンヘン・ゲルトナーブ

ラッツ国立歌劇場の演奏者と所持するレコードの演奏者を表4に示す。この中では、やはりフォルクスオーパーの演奏（1990年12月11日）が最高であった。

まず序曲であるが、レコードとLDのメルツェンドルファー（5, 6）を除き、原譜通りの演奏で、ここには“入江”や“ゴンドラ”のデロディーが取り入れられ、明るく美しい音楽である（図8）。フォルクスオーパーで聴いたものはさすがに手慣れた音楽と演技で、侯爵に名テナーのダラポツァ、デラックァにクレンマー、バルバラにシュタインスキーという配役で、まさに本場のオペレッタが堪能できた。このとき、すなわち1990年冬に私はボンにおいて開かれた宇宙生物学の専門家会議に出席するため渡欧したが、まずチュービンゲンに寄り、その年亡くなられた生理時計で有名な植物生理学者ビュンニング先生の墓に参り、夫人と、ビュンニング先生の後任となり、私の友人でもあるハーガー教授に会った。そのあと、チュービンゲンからボンに行き、ここで会議に出た後、帰途ローザンヌに旧友の植物生理学者ピレー教授に会い、12月9日、雪のなかをウィーンに飛んだ。そして11日、運良くフォルクスオーパーで「ヴェネチアの一夜」を観ることができた。この日の旅日記を抜粋する：

表4. 筆者の聴いた「ヴェネチアの一夜」と所持するレコード等の演奏者

演奏	指揮者	侯爵	デラックワ	バルバラ	パパコーダ
1.	K.Leitner	A.Dallapozza	H.Kraemmer	U.Steinsky	K.Huemer
2.	T.Schick	J.Jankovitz	V.H.Erkrath	L.Himmelheber	J..Preissinger
3.	O.Ackermann	N.Gedda	K.Dönch	H. Ludwig	P. Klein
4.	F.Allers	N.Gedda	C.Oppelberg	M.Heistermann	H.G.Grimm
5.	E.Märzendorfer	C. Bini	K.Dönch	E.Steiner	F.Stricker
6.	“	“	“	“	“

	カラムロ	アンニーナ	チボレッタ	エンリコ	コンスタンティア
1.	J.Dickie	U.Steinsky	G.Löwinger	F. Jirsa	-
2.	F. Silla	M.Starke	C.Leyser	P.Baumgardt	D.Morein
3.	E. Kunz	E.Schwarzkopf	E.Loose	A. Diffring	-
4.	C. Curzi	R.Streich	C.Görner	H.Prey	A.Rothenberger
5.	W.Brendel	J.Scovotti	E.Schary	-	-
6.	“	“	“		

演奏・録音：1. ウィーン・フォルクスオーパー（1990年12月11日）  
 2. ミュンヘン・ゲルトナープラッツ国立劇場（大阪、1990年7月16日）  
 3. フィルハーモニア管弦楽団ロンドン（1954）  
 4. バイエルン・グラウンケ交響楽団（1968）  
 5. ハンガリー国立歌劇場管弦楽団（1976）  
 6. “（1975）

## Overture

Johann Strauß

Maestoso

*f* Pos. *ff* *poco rit.* *f*

*ff* *ff* *f marc.* *f marc.*

*p* *cresc.* *fz* *ff* Beck.

Marcia alla breve, quasi maestoso

*fp* *mf marc.* Pk.

(C) 1967 by Ang. Cranz KG, Wiesbaden  
Edition Cranz, Wiesbaden, London, Bruxelles, Wien

Alle Rechte vorbehalten  
All rights reserved  
Tous droits réservés

C 50123

図 8. ピアノ・スコアの序曲のはじめ。



“12月11日、あまり寒くない。R子(註:妻麗子)はElisabeth母娘とStraussの家や Belvedere 宮殿, Karlskirche教会などへ出かける。こちらErichと久しぶりに Pflanzenphysiologisches Institut (註:ウィーン大学植物生理学教室)に行き、Urlや Kinzelに会う。昼食後、一緒に Bodenkultur (註:ヒューブル教授の勤める農科大学)を訪ねた後、一旦ホテル (Kaiserin Elisabeth)へ帰り、18時にホテルを出、DでSchottentorから41で Volksoperへ。席はParkett, links 2番の10, 11, 12でちょうど真ん中あたりの前から2番目でよく見える。Elisabethも来る。このオペレッタは生き生きしてすばらしく美しい、とくにDallapozzaのHerzog (註:伯爵)が良く、Anninaを歌ったSteinskyがいい声だけでなく、演技もすばらしい。また、Pappacodaの Huemerが印象に残った。2-3幕続けて演奏し、21:40時頃終わる。外は寒くなった。暫くしてElisabeth母が迎えに来たり、ホテルまで送ってくれる。大体荷造りして風呂に入り、0時頃就寝。”

さらに、バイエルン王ルートウィヒ2世が創設し、100年以上の歴史を持つオペレッタ劇場であるミュンヘンのゲルトナープラッツ劇場の演奏もフォルクスオーパに劣らぬほどの好演であった。歌手たちはフォルクスオーパの人たちほど知られていないが、ドイツその他各国出身の芸達者ばかりであった。ウィーンに先だって大阪でこのオペレッタを見た当日の私の日記には以下のように記してある。

“1990年7月17日、晴れ夜雨。(前略)夕方グランド・ホテルへ。伊東良太君(註:筆者の中学時代以来の朋友)と会い夕食(Wiener Schnitzel)そしてFestival Hallへ。Staatstheater am Gärtnerplatzの[Eine Nacht in Venedig]。AnninaのMonika Starkeは大変良かった。CaramelloのFred Sillaはひ弱。PappacodaのJohannes Preissinger、HerzogのJosef Jankovitzはまあまあ。北村、森本夫人に出会う。Moscow訪問中のKohl首相とGorbachevが会談。大事件になりそう。Philippinneで地震。”

(註:この時期、ドイツ統一、ソ連崩壊の前夜であった)

ツェルとジュネーの台本によるシュトラウスのピアノ楽譜には指定があつて、第1幕のフィナーレで歌われる“ゴンドラ”はカルメロが歌うことになっている(図9)。しかし、アラーズ版(4)では侯爵が歌っている。前述のように、第2幕で歌われる“入江”には指定がない(図10)。事実、演奏によってカラメロが歌ったり、あるいは侯爵が歌ったりしている。また、メルツェンドルファーのハンガリー版LDでは序曲のあとすぐに海から船で侯爵が登場し、“かつてはペルシャ王のように、後宮3000を夢見たが、今はたった一人のバルバラだけ・・・”とニネットのワルツを歌いながら船でヴェネチアへ乗り込み、バルバラ宛の手紙をカラメロに託す、というように、オリジナル版におけるエンリコの役割を兼ねた演出になっている。

第1幕の6、“仮面をつけて”は第1, 2幕のフィナーレおよび第3幕の終わり、すなわちオペレッタ全体の締めくくりに使われている(図11)。このオペレッタがカーニヴァルを背景にしていることを示しているからであろう。

Andante mosso  
*dolce*

c. *rit.* ----- *molto*

Vl. *pp*

Komm' \_\_\_\_\_ in die Gon - del, mein  
Love, \_\_\_\_\_ I am here \_\_\_\_\_ in my

Lieb-chen, o stei - ge doch ein, \_\_\_\_\_ all - zu - lang schon fahr'ich trau - ernd so  
gon - do - la wait - ing - be - low. \_\_\_\_\_ With a sweet and ten - der pas - sion my

図9. ピアノ・スコアの“ゴンドラにお乗り。いとしい人”の部分。Cハカラムロ。

Sehr mäßiges Walzertempo

Piano *pp* *poco rit.* *pp*

Ach, wie so herr-lich zu  
Wo - man I can't un-der-

schau'n, \_\_\_\_\_ sind all' die lieb-li - chen Frau'n, \_\_\_\_\_  
stand, \_\_\_\_\_ she gives her heart and her hand. \_\_\_\_\_

C 50123

図10. ピアノ・スコアの“入江のワルツ”の部分。

Stichwort: Und was für Füße!  
(Papacoda) And what for foot!

## 6. QUARTETT 〈ALL THROUGH THE NIGHT〉

Walzertempo

Annina

Ciboletta

Caramello

Pappacoda

Piano

*ff Pos.*

*pizz.*

Gemäßigtes Walzertempo ( $\text{♩} = 63$ )

A

C

C

P

*f pizz.*

*p dolce*

*f*

Al - le mas-kiert, Al - le mas - kiert, cos -  
All through the night till it is light, we'll

Al - le mas-kiert, Al - le mas-kiert, cos -  
All through the night, till it is light, we'll

Al - le mas-kiert, Al - le mas-kiert, cos -  
All through the night, till it is light, we'll

Al - le mas-kiert, Al - le. mas - kiert, cos -  
All through the night, till it is light, we'll

C 50123

図11. 各幕のフィナーレとなる“みんな仮面をつけて行くんだ”のピアノ・スコアの部分。

## 图 11-2

A  
pet - to! wie a - mü - sant das wird! In der Men - ge  
dance and sing till the dawn is bright. Life is wait - ing

C  
pet - to! wie a - mü - sant das wird! In der Men - ge  
dance and sing till the dawn is bright. Life is wait - ing

C  
pet - to! wie a - mü - sant das wird! In der Men - ge  
dance and sing till the dawn is bright. Life is wait - ing

P  
pet - to! wie a - mü - sant das wird! In der Men - ge  
dance and sing till the dawn is bright. Life is wait - ing

A  
bun - tem Ge - drän - ge sich ver - stek - ken und nek - ken,  
while we're de - ba - ting, why keep on he - si - ta - ting?

C  
bun - tem Ge - drän - ge sich ver - stek - ken und nek - ken,  
while we're de - ba - ting, why keep on he - si - ta - ting?

C  
bun - tem Ge - drän - ge sich ver - stek - ken und nek - ken,  
while we're de - ba - ting, why keep on he - si - ta - ting?

P  
bun - tem Ge - drän - ge sich ver - stek - ken und nek - ken,  
while we're de - ba - ting, why keep on he - si - ta - ting?

舞台演奏はフォルクスオーパーもミュンヘンもかなり忠実に従っていたが、レコードやレーザーディスク、とくにメルツェンドルファー版では改変が甚だしい。すべての演奏で2と3が入れ替わり、アンニーナの登場はパパコーダとチボレッタの2重唱のあとにされている。改変が甚だしい場合、楽譜番号の順序を入れ替えるなど様々で、ピアノ・スコアに従って聴くのが難しいほどである。レーザーディスクとレコードの1つはメルツェンドルファーの演出・指揮によるハンガリー国立管弦楽団と合唱団の演奏で、メルツェンドルファーの特異な考えで改変をしたらしい。彼の演奏はオリジナルに従った、と解説にあるが、4人の役を除いている。すなわち、前述のエンリコ(Enrico Piselli, デラックワの甥の海軍士官、バルバラの恋人)のほか、市参議会議員のテスタッチオ(Giorgio Testaccio)、同じくバルバルッチオ(Stefano Barbaruccio)とその妻のアグリコーラ(Agricola)である。ころほど改変すると、原曲どおりとは言い難く、いかに自由とはいえ、あまり気持ちは良くない。

このように、このオペレッタは指揮者、演奏者がかなり自由な意図によって改変されるので、表5に以上の6種類の録音の演奏者を示しておく。このうち、5と6の演奏は上述のように、メルツェンドルファーの改変が特殊で、ウィーンや大阪(ミュンヘン)、あるいはアラズ版レコードとかなり異なっている。とくにレーザーディスクは画面効果のためか、レコードとも多少違っている。また、アッカーマンとアラズ版レコード(3, 4)は豪華キャストで、ピアノ・スコアにない曲も入り、どちらかというといふ自由に音楽を聴かせ、名歌手たちの歌を聴かせるというサービスを心得ているように見える。しかし、筆者はこれらの版の演奏が気に入っており、ニコライ・ゲッダ、エーリッヒ・クンツ、カール・デンヒ、エリーザベト・シュワルツコップ、アンネリーゼ・ローテンベルガー、リタ・シュトライト、ヘルマン・プライらの素晴らしいアリアに堪能できる。

アッカーマン版(3)ではアンニーナをエリーザベト・シュヴァルツコップが歌うという豪華さで、そのため第1幕で原台本にない歌を歌わせている。この版ではカラメロをエーリッヒ・クンツが歌い、その「入江」は秀逸で、筆者は大好きである。クンツのウィナーリートは最高で、そのためかその「入江」もウィーン風に聞こえる。本来は、スパゲッティ料理人のカラメロ役にはクンツのようなバリトンでなく、アラズ版のクルツィのような明るいテナーが向いているのであろうが。

アラズ版ではエンリコ役のヘルマン・プライが最初に登場し、伯母のバルバラ(留守だが)の窓の下で“イタリーは太陽の國・・・”(In Italien heissen Sonnenland・・・)とセレナーデを歌い、パパコーダに手紙を託す。他の演奏ではこの場面はなく、バルバラへの手紙は侯爵が託す。また、このエンリコに第1幕の終わりに他にない曲“恋の都、夢の都(Stadt der Liebe, Stadt der Träume)”を、第3幕では“カーニヴァルの時だ・・・(Der Karneval heut' die Stunde regiert!)”を歌わせてその存在を強調している。あとで、バルバラはアンニーナに替え玉になって貰い、自分はムラノ島へ行かず、カーニヴァルでエンリコとデートするのであるから、エンリコが最初に登場するだけでなく歌う方が解りやすいように筆者には思える。

また、このアラズ版では主役とはいええないコンスタンティアと侯爵が恋を語り、この役にウィーンの名ソプラノ、アンネリーゼ・ローテンベルガーを配し、彼女に美しく“月は高く海に

照り (Sul mare lucica…)”と歌わせ、侯爵役のニコライ・ゲッダにも “Ich hab’ dich lieb” と歌わせている。舞台では聴けないサービスで、大変楽しめる。また、この版ではアグリコーラに名アルトのギゼラ・リッツ (Gisela Litz) ら、錚々たる名歌手を配している。

これらの名歌手によるサービスは、「ヴェネチアの一晩」のアッカーマン、アラーズ版だけでなく、他の有名指揮者の指揮する他のオペレッタ・レコードでも同様に、舞台では考えられないような配役で演奏し、レコードにしていることが多い。その例は「こうもり」のカラヤン版などでも記した (増田芳雄、1998)。

本稿で紹介する演奏者たちの横顔は文末にまとめるので、前報とあわせてご参照下さい。

## II. 「ジプシー男爵」

シュトラウスの10番目のオペレッタ「ジプシー男爵」(Der Zigeunerbaron) は、それまでのものと異なって珍しくツェルとジュネーの台本によらないものであった。すなわち、シュトラウス3番目の妻アデーレ (Adele) の勧めでハンガリーの作家モール (Jokai Mor、, 1825-1904) の小説からウィーンのシュニッツァー (Ignaz Schnitzer) が書いた台本を用いてこのオペレッタを作曲した。初演は、シュトラウス60歳の誕生日前日の1885年10月24日、アン・デア・ウィーン劇場で行われた。

このオペレッタは大成功で、現在でも前報に記したようにフォルクスオーパー上演のベスト5に入っている (増田芳雄、1998)。ちなみにこのベスト5のうち、「こうもり」(Die Fledermaus)、「ウィーン気質」(Wiener Blut) はウィーンの上流市民生活を舞台にしているが、他の3つのうちツェラーの「小鳥売り」(Vogelhändler) はドイツ西部を舞台に、オーストリア・アルプスのチロルの農民を題材にしているのに対し、残りの2つはオーストリアの歴史的背景を扱っている。すなわち、ミレッカーの「乞食学生」(Der Bettelstudent) はポーランドの独立運動が題材になっており、シュトラウスの「ジプシー男爵」はオーストリアの対トルコ戦争が背景にある。そのような意味では、この「ジプシー男爵」はシュトラウスのオペレッタの中では特異な地位を占めているといえよう。

歴史的に見ると、オーストリアとオスマン・トルコの関係は、ロシアの南下政策が原因であるトルコとロシアとの関係と同様、オスマン・トルコの西欧への進出を阻止しようとする戦争の連続であった。そこにはハンガリーおよびユーゴなど、いわゆる東欧キリスト教国が絡んでおり、このオペレッタもベオグラード近辺を舞台にした18世紀のオーストリアとトルコの政治と戦争が扱われているに止まらず、さらにジプシーたちが一枚噛んでいる。いわば、当時の東欧における多民族国家や各種民族の複雑な状況が画かれているとも言える。そのような意味においてこの「ジプシー男爵」はシュトラウスの美しい音楽とともに、極めて興味深く、そして芸術的にも優れた美しいオペレッタであり、この理由から本シリーズ取り上げることにした。

## 1. 「ジプシー男爵」の時代とオスマン・トルコ

さしもの繁栄を誇ったビザンチン帝国、すなわち東ローマ帝国も1453年、遂にオスマン・トルコの名君主メフメット2世 (Mehmet II) の率いる大軍により、血湧き肉踊る大決戦ののち、コンスタンチノーブルが陥落し、滅亡した。金角湾口を帝国側が大鎖で封鎖したので (この鎖はイスタンブールの軍事博物館に現在も置いてある)、メフメット2世は軍艦を山を越えて湾内に運ばせる、という奇想天外な戦法でコンスタンチノーブルを攻めた。この歴史的事件は塩野七生の小説「コンスタンチノーブルの陥落」に生き生きと描かれている。以後、東ヨーロッパのキリスト教國はオスマン・トルコの破竹の勢いによって席卷され、遂に神聖ローマ帝国皇帝のいるオーストリアの首都ウィーンに迫った。これが1529年の第1次ウィーン包囲である。オスマン・トルコ軍はこの時ウィーン攻略に失敗したが、続いて1683年、再びヨーロッパに進攻しウィーンに迫った。これが第2次ウィーン包囲である。この時もポーランドなどオーストリアを支援するヨーロッパ軍の反撃でオスマン・トルコは敗退し、以後オスマン・トルコの勢いは衰退への途を辿ることになる。これらオスマン・トルコに対ヨーロッパ・キリスト教國との戦争を表5に纏める。

表5. オスマントルコとキリスト教ヨーロッパの関係

年	出来事 (科学的事項)
1453	メフメット2世によるコンスタンチノーブル陥落、東ローマ帝国の滅亡
1529	第1次ウィーン包囲。レパントの海戦
1569	露土戦争—1
1645	ヴェネチアとの戦争。クレタ島領有 (ハーヴェイの血液循環説、1628)。
1663	オーストリアとの戦争。オーストリアは中部ハンガリーを獲得 (マルピーギが毛細血管発見、1661)。
1672	ポーランドとの戦争。ウクライナの一部をトルコに割譲。
1676	露土戦争—2 (レーヴェンフックが細胞を発見、1680)。
1683	第2次ウィーン包囲。オーストリア、ヴェネチア、ポーランド連合軍はベオグラードを陥落。カルロヴィッツ条約でハンガリーはオーストリアに帰属。
1686	露土戦争—3 (カメラリウスが植物の雌雄を発見、1695)。
1719	露土戦争—4
1714	ヴェネチア、オーストリアとの戦争。ベオグラード陥落。
1717	セルヴィア戦争。1718年のPASSAROVITZ条約でオーストリアはバルカンに進出。
1735	露土戦争—5 (リンネの自然分類、1734)。
1736	オーストリアとの戦争。1739年のベオグラード条約でセルヴィア・ワラキアをトルコに割譲。
1740	オーストリア継承戦争。
1768	露土戦争—6 (プリーストリが酸素を発見、1771; ラプラスが惑星の平均運動が不変であることを証明、1773; ラヴォアジエが燃焼と還元における酸素の役割を証明)。
1787	露土戦争—7 (ガウスの「算術の研究」、1801)。
1806	露土戦争—8。トルコに対し決起したセルヴィア人がベオグラードを占領 (ドールトンの「化学の新体系」、1808; ラマルクの「動物哲学」、1809; アヴォガドロの仮説、1811)

- 1814 ウィーン会議
- 1821 ロシア・ギリシャとの戦争。ギリシャ独立戦争。露土戦争—9（ヴェーラーの尿素の人工合成、1828；ダーウィン、ビーグル号で世界回航へ；フォン・モールが植物で細胞分裂を発見、1835；シュライデン、シュヴァンの「細胞説」、1838-39）。
- 1840 アヘン戦争（ブンゼンがブンゼン電池を発明、1841；ドップラーの原理、1842；ジュールの仕事当量に関する実験、1843）。
- 1848 2月革命（クラウジウスの熱力学第1法則、1850；パストゥールによる分子の対称および不斉の研究、1853）。
- 1855 クリミア戦争（フィルヒョーの「細胞は細胞から」、1855；パストゥールの発酵説；ケクレの原子価説、1858；ダーウィンの「種の起源」1859）。
- 1863 露土戦争—10（パストゥールが自然発生説を否定、1862）。
- 1867 トルコ、ベオグラードから最終撤退（メンデルの「植物雑種の実験」、1865；クラウジウスの熱力学の第2法則—エントロピーの概念、1867；ノーベルによるダイナマイトの発明、日本大政奉還、1867；スエズ運が開通、メンデレーエフが元素周期律表を発表、1869）。
- 1871 ドイツ統一（ファン・デル・ヴァールスの状態式、マクスウェルの「電磁気学概論」、1873）。
- 1877 露土戦争—11（シュトラスブルガーによる植物細胞の有糸分裂の研究、1875；ペファーによる浸透圧の発見、東京帝国大学設立、1877；ファーブルの「昆虫記」1879；コッホが結核菌を発見、ザックスの「植物生理学講義」1882）。
- 1897 ギリシャ・トルコ戦争—1（エングラの植物分類体系、1888；プランク「エネルギー保存の法則」、北里柴三郎の破傷風菌の純粋培養、1889；シュトラスブルガー「植物学教科書」、1894；レントゲンがX線を発見、1895；平瀬作五郎がイチョウの精子発見、1896；キュリー夫人がラジウム、ポロニウムを発見、1898；メンデルの法則再発見、1900）。
- 1911 イタリアとの戦争。トリポリ戦争。
- 1914 第1次世界大戦。オスマン・トルコ崩壊、トルコ共和国成立。ベオグラードはオーストリア領へ。

「ジプシー男爵」の歴史的背景となるのは表5に示したように、オーストリアが対オスマン・トルコ戦争によってベオグラードを占領、バルカンへ進出した1714-17年戦争から20余年後のことで、ベオグラード条約、オーストリア継承戦争前ごろのこと、となっている。舞台はバナト (Banat) 地方である (図12)。このバナト地方はユーゴ北東部のセルヴィア北部からルーマニア西部トランシルヴァニアにわたる、ドナウ河から北の面積28,000平方キロを占める天然資源の豊富な地方である。長くハンガリーの支配下にあったが、のちにオーストリア・ハンガリーの領土になった。しかし第2次世界大戦後、この地方はルーマニアとユーゴスラヴィアに分割された。この歴史の変遷を見れば、この地方がいかに複雑な地理的、政治的、宗教的そしておそらく人種的状况に置かれていたかが理解できよう。それだけにこのあたりを題材にしたストーリーが興味あるものであり、また、オーストリア、あるいはヨーロッパ全体の人々に身近な関心を持たしめるに十分であったのではないか。

このオペレッタに登場するのはオーストリア・ハンガリー人のほか、ジプシーたちと、ジプシーの老婆に育てられたトルコ太守の娘が登場する、いわば異なった民族が関わり合うという複雑な人間社会を主題にしたものである。そこで本題に入る前にもう一つ、ジプシーについて述べておかななくてはならない。



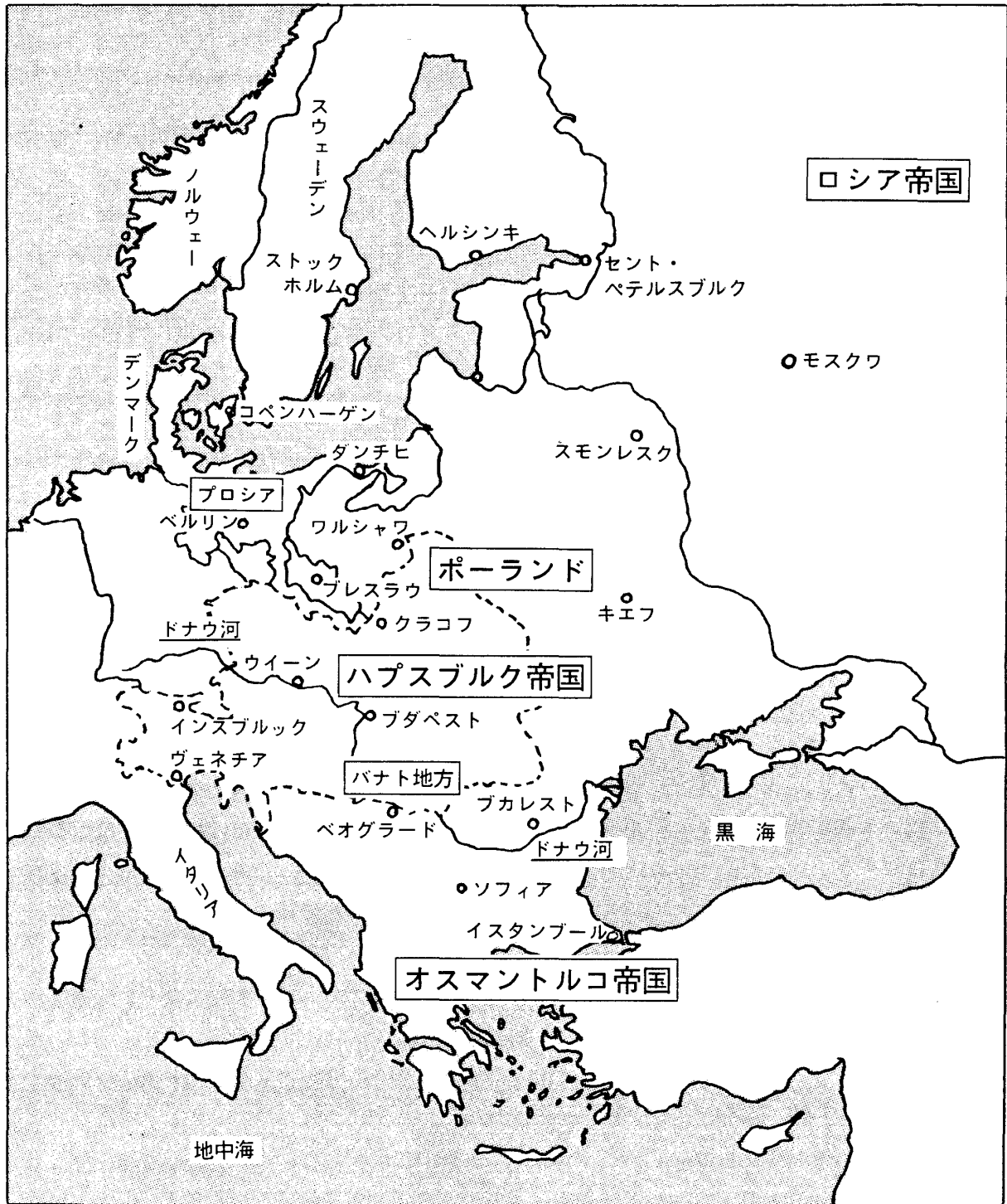


図12. 「ジブシー男爵」の舞台となった18世紀半ばのバルカン半島。オーストリア・ハプスブルクがオスマン・トルコから獲得した時期のパナト付近を示す。パナト (Banat)、ベオグラード (Belgrade)、ブカレスト (Bucharest)、ソフィア (Sofia)、イスタンブール (Istanbul)、ブダペスト (Budapest)、ウィーン (Wien)、ヴェネチア (Venezia)、インスブルック (Innsbruck)、クラコフ (Krakow)、キエフ (Kiev)、ブレスラウ (Breslau)、ワルシャワ (Warsaw)、ベルリン (Berlin)、ダンチヒ (Danzig)、スモレンスク (Smolensk)、リガ (Riga)、ザンクト・ペテルスブルグ (St. Petersburg)、ヘルシンキ (Helsinki)、ストックホルム (Stockholm)、ドナウ河 (Donau)。

## 2. ジプシーについて

ツイガン (Tsigan)、エジプティアン (Egyptian) の2系統の広く分布したものなど、50種類の呼び名をもつ放浪民族ジプシー (gypsy)、あるいはドイツ語ではツイゴイナー (Zigeuner) はインド北西地域を根拠地として発生したといわれる。その人口は約500万と言われ、その内100~150万人がヨーロッパにいたるといわれ、とくにバルカン諸国に多い。

ジプシーがインドを出たのは9-10世紀と考えられ、近東諸国に長く止まっていたらしい。アジアに拡がったジプシーに対し、ヨーロッパ・ジプシーは14-15世紀に至り、小アジアからバルカン半島に波状的に移動したと言われ、そこからヨーロッパ各地に拡がり、一部は海を渡って移動した。彼らの外貌などについてはいろいろ記述されており (たとえばBloch、1973)、またその主な職業についても多く挙げられている。すなわち、もともとインドの低カースト出身のためか、死刑執行、手品、占い、鍛冶屋、職業的盗賊、などが挙げられている。彼らの言葉もいろいろであるが、基本的にはインド・アリア語であり、方言はすべて中世ギリシャ語から得たものという (Bloch、1973)。これはヨーロッパ・ジプシーが14世紀ギリシャに移動、ここに長く止まったためと言われる。移動生活をするのが特徴で、現在でもヨーロッパの主な都市では流れてきたジプシーの女子供がひたくりなどをするので、用心するよう、旅行社などが警告するくらいである。

「ジプシー男爵」の舞台である北バルカンではジプシーたちは保護され、軍隊にも入り、解放されて土地すらもっていた。とくに精錬術を得意とする職業としていたらしい。 Bloch (1973) の本には「ジプシー男爵」の舞台バナトについて以下の記述がある：

“18世紀にトルコ人からバナトを取ったことが、流浪のジプシーをハプスブルク家のオーストリアに統合することになり、彼らはハンガリー人に課せられていた税金に当たる人頭税を払わなければならなくなった。それは15歳以上の男子にかかるものであったが、炭を焼くものは森林の維持のために余分の割り増しを払い、砂金をとるものは砂金で払っていた。そして、注目すべきことに、徴税の仕事はジプシー自身にまかされていたのである。1761年、マリア・テレジア (Maria-Theresia, 1717-1780) は、ジプシーを定住させ、正常な社会に彼らを統合しようとする一連の措置を講じた。「新農民」とか「新ハンガリー人」と呼ばれたジプシーは、天幕で寝てはならないことになった。人々は彼らの子供たちを取り上げてキリスト教徒の家庭に託し、また、もし彼らがまともな生計を立てる方法がないときには、結婚することを禁止したのである。その他、昔からの迫害がそうであったように、効果のない措置もあったが、昔の迫害の精神は相変わらずで、1782年には拷問によって大勢のジプシーに窃盗、殺人、食人肉の罪を無理に自白させるという恐ろしい裁判事件もあった。そして彼らのうち45名が処刑されたあとで、ヨゼフ2世 (Josef II) によって設けられた委員会が、有罪者を除いて、生命を失ったものはないと証言したが、それにもかかわらず、ジプシーが人肉を食べたといううわさで全ヨーロッパはもちきりであった。同じヨゼフ2世は、今度はジプシーを同化しようとしたが無駄であった。ついでだが、宮廷ではジプシーの音楽が大流行した時代である。”

このように、ハプスブルクの領地であったバナトでは、ジプシーは保護されていた反面、明らかにひどい差別を受けていたことは確かであった。彼らの占い、精錬、それに音楽はオペレ

ッタでも取り上げられている。ジプシーの音楽は当時宮廷でも大流行したように、大変特徴があり、多くの作曲家がジプシーに関する音楽を作曲している。ラベル (Maurice Ravel, 1875-1937) の「チガース」(Tzigane)、サラサーテ (Pablo de Sarasate, 1844-1908) の「チゴイネルワイゼン」(Zigeunerweisen)、シューマン (Robert Schumann, 1810-1856) の「流浪の民」(Zigeunerleben) など枚挙にいとまがない。ジプシーの音楽がとくにハンガリーで特異な位置を占めていたことは現在も良く知られている。ハンガリー・ジプシーの音楽はハイドン、シューベルト、ブラームス、リストら古典音楽に影響を与えた。なかでもチャルダシュ (Csárdás) は前報の「こうもり」(増田芳雄、1998) でハンガリーの伯爵夫人を触れ込んだロザリンデの歌う故郷の歌が有名だが、このほかカールマン (Emmerich Kalmán, 1882-1953) の「チャルダシュの女王」(Die Csárdásfürstin) などがある。チャルダシュは2/4拍子で、形式はゆるやかな部分 (ラッス、lassu) から次第に急速な部分 (フリッス、friss) へ移行する激情的な舞踊音楽である。また、父シュトラウスにも「ジプシー・ギャロップ」(Gitana Galopp, Op.108) という作品がある。

ジプシー音楽には音階上の特徴がある。すなわち、ハ調のドレミを見ると、ド、レ、ミ (フラット)、ファ (シャープ)、ソ、ラ (フラット)、シ、ドとなる (図13)。ヨーロッパ人にとっ



図13. シブシーの音階 (軍司貞規、1982から)。

てこの「ジプシーの音階」は悲劇的に響くようで、ビゼー、フランクらが歌劇や交響曲にこの音階を採用している。また、特異な例として、映画「第三の男」(The Third Man) で有名になったチター (Zither) によるメロディーがある。大変興味ある話なので私自身の経験も含めてここに紹介しておきたい (軍司貞規、1982)。戦後、4国共同統治されていたウィーンにおけるペニシリン密売を主題にしたこの映画は英国のキャロル・リード (Carol Reed) によって制作された。バックグラウンド・ミュージックにはリード監督が見いだしたウィーンのホイリゲ (Heurige) のチター弾きであったアントン・カラス (Anton Karas) が選ばれた。この映画で一躍有名になったカラスは金持ちになり、自分でホイリゲを所有するほどになった。私も、このカラスのチターが聴きたいと、1962年春ウィーンを訪れたとき、ウィーン大学の友人たちにカラスのホイリゲへ案内して欲しい、と頼んだ。ところが、何でも希望を叶えてくれる彼らが珍しく言を左右にし、私の願いは実現しなかった。あとで伝え聞くところでは、カラスは当

時のウィーンの人たちに評判が悪く、やがて引退したという。彼がウィーンの人々に好意を持たれなかった理由として私は以下のことを聞いた。あのハプスブルクの栄光と芸術の中心であったウィーンは第2次世界大戦によって破壊され、分割占領されるという悲劇に陥れられた。この英国映画は芸術の都ウィーンのイメージを壊す戦後の暗黒面を描いており、ウィーン市民はこの映画を不愉快に思っていたのに、これにカラスは協力して金儲けをした。もう一つの、実はもっとも真実らしい理由は、カラスはジプシーではないか、という出自に関する疑念である。それは、カラスという名前がジプシーという可能性を示すこと、そして有名になった「第三の男」のメロディーが「ジプシーの音階」である、ということである。たしかにこのメロディーは上記のジプシー音階によっているように聞こえる。ヨーロッパの人々は多くの名曲にみるようにジプシー音楽を好みながらも、ジプシーの人々を差別し、現在もその風潮は変わらないように見える。

こうして、シュトラウスのオペレッタ「ジプシー男爵」にはバナト地方のバルカン人、トルコ太守の娘、ジプシーなど、複雑な土地に相応しい多彩な人物が登場する。

### 3. 「ジプシー男爵」のストーリーと音楽

表6. 「ジプシー男爵」の登場人物

Graf Peter Homonay：県知事の伯爵	
Conte Carnero：県役人	Mirabella：カルネロの妻でチューパン家の家庭教師
Sandor Barinkay：この地方豪族の子	Saffi：ツイプラの養女、実はトルコ太守の娘
Kalman Zsupan：豚飼い	Arsena：チューパンの娘、オトカールの恋人
Ottokar：ミラベラとカルネロの息子	Czypra：ジプシーの老婆

登場人物を表6に示す。このオペレッタでは豚飼いのチューパンが舞台回しとして重要な役割を演じている。オペレッタの構成は表7に示すとおりで、私の聴いた限り、また私の所持するレコードの演奏ではこの構成に従っており、上述の「ヴェネチアの一夜」のような改変は全くない。

まず、序曲であるが、この曲は「こうもり」の序曲のように、第3幕の“入場行進曲”と並んで独立して演奏会でもしばしば演奏される(図14)。いきなりハンガリー風、そしてジプシー音楽の香りのする曲で、オペレッタ中のアリア・メロディーが取り込まれている。以下、表7の音楽構成(番号で示す)にしたがってストーリーを述べたい。

表7. 「ジプシー男爵」の構成

## Overtur

## I. Akt (第1幕)

1. Introduction: "Du wär' kein rechte Schifferknecht" (Boatmen's chorus)
2. Entre-Couplet: "Als flotter Geist" (An Orphan from my early days)
3. Melodrama und Ensemble: "So täuschte mich die Ahnung nicht"  
(My second sight has told me so)
4. Couplet der Mirabella "Just sind es vierundzwanzig Jahre"  
(Exactly four-and-twenty years ago)
5. Ensemble: "Dem Freiernacht die Braut" (A suitor seeks a bride)
- 5a. Sortie: "Ein Falter schwirrt ums Licht" (The Moth draws near the flame)
- 5b. Sortie: "Hochzeitskuchen" (Bridal cake)
6. Zigeunerlied: "So elend und so treu" (None braver, none so true)
7. Finale I: "Arsena, Arsena"

## II. Akt

8. Terzett: "Mein Aug' bewacht" (The morning breaks)
9. Terzett: "Ein Greis ist mir im Traum erschienen" (Beside the rim of yonder clearing)
10. Ensemble: "Auf, auf, vorbei ist die Nacht" (Wake, wake, for high is the sun)
10. 1/2. Sortie (Exit for chorus)
11. Duett: "Wer uns getraut" (Who tied the knot?)
12. Sittenkommission Couplets: "Nur keusch und rein" (To trample on Evil of every sort)
12. 1/2. Werberlied: "Her die Hand" (Recruiting Song)
13. Finale II: "Nach Wien" (Away)

## III. Akt

## Entr'acte

14. Chor: "Freuet Euch" (Oh, rejoice!)
15. Couplet: "in Mädchen hat es gar nicht gut" (I have no luck at all in love)
16. Marsch-Couplet mit Chor: "von des Tajos Strand" (Now we are home again)
17. Einzugsmarsch: "Hurra, die Schlacht mitgemacht" (March, march, warchiug along)
18. Finale III: "Heiraten, Vivat" (Wedding-bells! Hurrah!)

{第1幕} バナト地方の廃墟で遠くから合唱“水を恐れる者は本当の水夫ではない”(1)が聞こえる中、オトカーがあちこちを掘り返して、トルコ総督の残した財宝を探している。これを見てジプシーの老婆ツイプラが、そんなものは無いとからかっている。そこへ、この地方の豪族の子バリンカイが亡命から帰ってくる。父の豪族はここから敗送したトルコと内通したという罪を得て、亡命を余儀なくされたが、父の罪が許され、息子が故郷へ帰ったのだった。彼は“気楽な若者だった私は、小さいときから孤児となり全世界を旅行した”(2、図15)と歌う。

# DER ZIGEUNERBARON

## THE GIPSY BARON - LE BARON JZIGANE

Komische Oper in 3 Akten  
nach einer Erzählung des Maurus Jokai von Ignaz Schnitzer

English Text by Henrik Ege

### OUVERTURE

Musik von Johann Strauss

**Allegro moderato**

**sostenuto**  
Clar. Solo

**Tempo I**

**2**

**Fl. I Solo**  
*Cadenza*

Copyright 1948 by Alwin Cranz, Wien  
Edition Cranz, Wiesbaden - Bruxelles - London

C. 50 087

Aufführungsrecht vorbehalten  
Rights of public performance reserved  
Droits d'exécution réservés

図14. 「ジプシー男爵」序曲のピアノ・スコア部分。

*f*

Ja!  
Ja!  
Ah!

VI. I  
Tr. I  
*f* (Tutti)  
VI. II  
*dimin. e poco rit.*

**Tempo di Valse**  
*mf*

Ja, das Al - les auf Ehr das kann  
Ja, Chan - geur und Jong - leur Pre - sti -  
Such was life in my youth, ev' - ry

38

*mf* Archl Cor. I/IV  
Fl. Cl. Tr. I/II

Ich und noch mehr } wenn man's kann un - ge -  
di - gi - ta - teur } brains are all that you  
word is the truth,

*poco ritard. e dimin.* *a tempo*

fähr Is nit schwer, Is nit schwer.  
need, and you're bound to suc - ceed.

*poco ritard. e dimin.* *a tempo*

Cor. I Solo

C. 50 087

図15. バリンカイの歌(2)のピアノ・スコア部分。

Als flotter Geist, doch früh verwaist, hab' ich  
 Die ganze Welt durchreist,  
 Faktotum war ich erst und wie  
 bei gerade einer Menagerie,  
 Vom Walfisch bis zum Goldfasan ist mir  
 Das Tier-reich untertan,  
 Es schmeichelt mir die Klapperschlange

An orphan from my early day I've  
 earned my bread  
 in various ways I spent my early life,  
 you see attached to a menagerie.  
 I made the boa constrictor do all sorts  
 of things I told him to.  
 And rattle snakes to shom I'd prattle,

.....  
 これはよく知られたメロディーである。付き添ってきた県の役人カルネロにより、バリンカイが父の息子で、この土地を所有することを証明するため、書類にチューパンとツイプラのサインを求めるが（図16）、彼らは字が書けず、十字を書く。バリンカイの帰郷を予期していたツイプラは“私の予感は大当たっていた。私は前から知っていた”と歌う(4)。



CH. V. SCH.

図16. カルネロがチューパンに書名を求める場面 (Christl Schwind)。第1幕。



## 6. ZIGEUNERLIED

„So elend und so treu“ (Saffi)

(None braver, none so true)

Andante con moto

Saffi *p*

So elend und so treu ist keiner auf Erden wie der Zi-geuner.  
None braver, none so true, as foemen or com-rades than the Zi-geuner.

Fl. I Solo *p* Ob. I (Ob.) Cl. I/II Archi Cor. II Solo

O, ha-bet acht, — ha-bet acht — vor den Kin-dern — der — Nacht!  
Doch treu und wahr, — treu und wahr — ist dem Freun-der — immer — dar!  
Be on your guard! — Keep your guard, — by the outer gate, — close-ly barr'd,  
[91] No tru-er friend — to the end, — when a gipsy comes — as your friend!

VI. I/II (Archi)

Wo vom Zi-geuner Ihr — nur hört, — wo Zi-geu-ne-rin - nen sind, —  
Hält der Zi-geuner Dich — nur wert, — dann ge - horcht er — dir blind, —  
for when the gip-sy horde draws near, — children's laughter turns to fear.  
For when he gives his heart — to — you, — then his pro-mi-ses — come true.

VI. I VI. I col. Canto Fl. I [92] Cor. I Cl. I/II Vcl. Ob.

*fz Poco più moto*

Mann, gib acht, — auf dein Pferd,  
Mann, ver - trau — ihm dein Pferd,  
Man, look well — to your home!  
Trust him well — with your home,

Ob. I VI. I

VI. I *fp* Trbne. III Vcl.

図17. ゴッティの歌う“ジプシーの歌”(6)のピアノ・スコア部分。

豪族の遺産を自分のものにしようと企んでいたチューパンはバリンカイが帰ってきたので当惑するが、バリンカイが娘のアルゼナに興味を示しているのを利用して彼らを結婚させ、財産を得ようとする。そこへ出てきた家庭教師のミラベラは役人カルネロを見て驚く。彼は24年前のベオグラードの戦い以来消息不明になっていた彼女の夫だった。ここで夫婦と息子のオトカーは再会する。ミラベラが“ちょうど24年も経ちます”(4)と歌う。

チューパンの娘アルゼナが登場、バリンカイは彼女に求婚する。ここで合唱“花嫁が求婚者に近づく”(5)と歌う。チューパンは喜び、バリンカイとアルゼナそしてカラメロとミラベラの2組の結婚式を挙げよう、と提案する。しかし、アルゼナはこれを拒否、夫になる人は少なくとも男爵でないと資格がない、と尊大に断り、“蛾が一匹、光の回りを飛び回る”(5a)と歌う。合唱(5b)“結婚式のケーキ”は省略される。がっかりして廃墟に戻るバリンカイの耳に、ツイプラの養女ザフィーによるジプシーの歌声“世の中にジプシーほど悲惨で忠実な者はない”(6)が聞こえ、彼はザフィーに愛を持つに至る。シュニッツァー (Ignaz Schnitzer) のピアノ・スコアに従ってこの“ジプシーの歌”の歌詞を下に記す(図17)

## 6. Zigeunerlied

So elend und so treu ist keiner auf Erden	None braver, none so true, as foemen
· wie der Zigeuner,	or comrades
O, habet acht, habet acht	Be on your guard, keep ;your guard,
Vor den Kindern der Nacht!	By the outer gate, closely barr'd,
Wo vom Zigeuner Ihr nur hört,	when the gipsy horde draws near,
Wo Zigeunerinnen sind,	children's laughter turns to fear/
Man, gib acht, auf dein Pferd,	Man, look well to your horse
Weib, gib acht auf dein Kind!	Ahm look well to your child!
.....	.....

そこへアルゼナを呼ぶ男の声が聞こえる。それはオトカーで、“アルゼナ、アルゼナ”(7)とひそかに歌う。この二人は愛し合う間柄であった。バリンカイはアルゼナが求婚を断った理由を知る。そこへジプシーたちが戻ってきて、バリンカイを自分たちの主人であると言い、彼はジプシーの男爵であると称する。彼はチューパンの許へ行き、自分は男爵になったが、アルゼナでなくザフィーを妻にする、と告げる。ここで再び「ジプシーの歌」の合唱となり(7)幕が下りる。

{第2幕} ジプシーの部落でザフィー、ツイプラと夜を過ごし、翌朝目を覚ましたバリンカイにツイプラは若い血(ザフィー)と財宝を見守っていた“私の眼は見守っている。夜も昼も。この優しく若き血とご主人様の財産を”(8)と歌い、バリンカイは改めてザフィーに愛を誓う。そしてツイプラが占い“一人の老人が夢に現れた”といい、バリンカイは財宝を探し当てる。有名な“宝のワルツ”(9、図18)の場面である。

*f* Saffi *p*  
 Ha, seht es winkt, es blinkt, es klingt, ach un-sern Blick-ken, welchein Ent-zük-ken,  
 Wealth of my dreams, it beams, it gleams, how as-toun-ding! My heart is bounding!

*f* Czupra *p*  
 Ha, seht es winkt, es blinkt, es klingt, ach un-sern Blick-ken, welchein Ent-zük-ken,  
 Wealth of my dreams, it beams, it gleams, how as-toun-ding! My heart is bounding!

*f* Barlnkay *p*  
 Ha, seht es winkt, es blinkt, es klingt, ach un-sern Blick-ken, welchein Ent-zük-ken,  
 Wealth of my dreams, it beams, it gleams, how as-toun-ding! My heart is bounding!

VI. I Ob. I Archl. Cl. I/II Fl. I  
*f* Cor. I Vcl. Tr. I/III Fg. II/III Tr. II/III *p*

*f*  
 seht hier das Gold, das rollt so hold, hier sind die Schätze, die wir ge-wollt!  
 Bright as the sun-ere day-is done, rich is the trea-sure that we have won!

*f*  
 seht hier das Gold, das rollt so hold, hier sind die Schätze, die wir ge-wollt!  
 Bright as the sun-ere day-is done, rich is the trea-sure that we have won!

*f*  
 seht hier das Gold, das rollt so hold, hier sind die Schätze, die wir ge-wollt!  
 Bright as the sun-ere day-is done, rich is the trea-sure that we have won!

*f* (come sopra) *f* 174 VI. I Ob. I Cl. I

Saffi *Poco meno*  
 Doch mehr als Gold und Geld ist  
 No Pa-ra-dise so sweet, when

Czupra  
 Doch mehr als Gold und Geld ist  
 No Pa-ra-dise so sweet, when

Archl. VI. I Cl. I/II  
*f* Cor. I/IV Archl. *pp* Vcl. Tr. I/II Fg. I  
 Ottoni

図18. “宝のワルツ” (9) のピアノ・スコア部分。

## 9. (Schatzwalzer)

Ha, seht es winkt, es blinkt, es klingt	As in our dreams, it beams, it gleams,
ach, unsern Blicken welch ein Entzücken,	how astounding! My heart is bounding!
Seht hier das Gold es rollt so hold,	Bright as the sun ere day is done,
Lasst seinem Räuschen fröhlich uns lauschen,	countless the treasure, wealth past all
	Measure,
Da sich voll zogen, was wir gewollt.	Riches and leisure, life has begun!

.....

.....

ジプシーたちが “朝だ、皆起きて働け” (10、101/2) と歌う。ここでそこへチューパンがやって来て、バリンカイとザフィーの結婚を誰が認めたのかと咎める。バリンカイとザフィーは“あほうどり” (Dompfaffe, 大聖堂の聖職者) とこたえ、“誰が私たちを結婚させたの、..” (11) と歌う。そこへ役人のカラネロが来て、“誰が許可したのか” (12) と咎め、ジプシーたちと騒ぎになる。

そこへ県知事のホモナイ伯爵がスペインでの戦争のため、兵隊を募集にやってくる。ホモナイの募集の歌 “さあ、手をさしのべて恋人と別れよ。我々と共に徴兵の酒を飲め” (121/2) を歌う。ワインを飲めば徴兵に応じることになることを確かめず、チューパンとオトカーはワインを飲んで兵隊に取られることになる。このとき、ツイプラは、ザフィーがジプシーの娘でなく、トルコの大守の娘であることを明かす。これを知ったバリンカイはザフィーが自分とは身分が違うことを悟り、募兵に応じ、発見した財宝もお国のために捧げてしまう。皆で “さあ、ウィーンへ!” (13) の合唱となり第2幕を閉じる。

第3幕| ウィーンのケルトナー門へ軍隊が凱旋してくる。女たちは再会できるのを喜び “ああ、再会の喜び” (14)、 “恋に幸運はなかった” (15) と歌う。チューパンはスペインでの武勇伝を誇張して自慢し、ターヨの岸で、腕をふるって敵を大いにやっつけた “(16) と歌う。そして一同、入場行進曲 “我らは遠い國で戦った” (17, 図19) を歌う。戦で勲功を立てたバリンカイは貴族に列せられて本当の男爵になり、財宝も返還されたので、チューパンは今や男爵のバリンカイを婿と呼ぶ。しかし、バリンカイはお前の婿はオトカーだ、私の妻はゾフィーで、私の命は女王様 (マリア・テレジア) だ “そうだ、私はお前の娘を..” (18) と歌い、彼を待っていたザフィーと結ばれる。一同、バリンカイをジプシー男爵と称えてフィナーレとなる。

17. EINZUGSMARSCH  
 „Hurrah, die Schlacht mitgemacht“ (Chor)  
 (March, march, marching along)

Tempo di marcia

(Tutti senza Fl.)  
*ff*

Tr. I/II 3 3 Tr. I/II 3 3

Ob. I/II  
 Tr. I/II

Tutti Archi

Cl. I/II Cor. I/II

Fg. I/II

Fl. I/II

Trbn. I III

Sopran

Alt Hur - rah die Schlacht mit-gemacht hab'n wir im fer-nen Land, Pul - ver -  
 March, march, march-ing a-long, see all the soldiers come, march, march,

Tenor

Hur - rah die Schlacht mit-gemacht hab'n wir im fer-nen Land, Pul - ver -  
 March, march, march-ing a-long, see all the soldiers come, march, march,

Baß

Hur - rah die Schlacht mit-gemacht hab'n wir im fer-nen Land, Pul - ver -  
 March, march, march-ing a-long, see all the soldiers come, march, march.

249

*mf* Tutti

dampf ist im Kampf, uns gar nicht un-be-kannt! Halt dich grad Ka-me-rad, hau zu mit  
 march-ing a-long, hark to the rolling drum. Left, right, oh, what a sight! Soon all the

dampf ist im Kampf, uns gar nicht un-be-kannt! Halt dich grad Ka-me-rad, hau zu mit  
 march-ing a-long, hark to the rolling drum. Left, right, oh, what a sight! Soon all the

dampf ist im Kampf, uns gar nicht un-be-kannt! Halt dich grad Ka-me-rad, hau zu mit  
 march-ing a-long, hark to the rolling drum. Left, right, oh, what a sight! Soon all the

図19. “入場行進曲” (17) のピアノ・スコア部分。

## 4. 「ジプシー男爵」の演奏

私は本場ウィーンで1972年(ライムント劇場)、1989年(フォルクスオーパー)、1995年(同)、1998年(同)、それに大阪公演したフォルクスオーパーを1989年に観た。また、全曲レコードを5種類もっているので随時これらを聴いて楽しんでいる。

1972年の時のプログラムは手元になく、その時の演奏の詳しい様子は憶えていないが、以後のウィーンと大阪におけるフォルクスオーパーの演奏者は表8のとおりである。歌手たちはい

表8. 筆者の聴いたフォルクスオーパーによる「ジプシー男爵」の演奏者

	1989	1995	1998	1989 (Osaka)
Leitung	R.Bibl	M.Mnayrhofer	D.Alden	A.Bibl
Homonay	M.Kraus	R.Katzbock	B.Brown	B.Skovhus
Carnero	K.Ruzika	K.Ofczarek	K.Ofczarek	K.Ruzicka
Barinkay	Z.Terzakis	E.Ivanov	M.Dvorsky	Z.Terzakis
Zsupan	H.Prikopa	A.Sramek	H.Zednik	R.Wasserlof
Arsena	M.Rudiferia	B.Steinberger	R.Pitscheider	U.Steinsky
Mirabella	A.Haas	F.Prager	R.Holm	G.Juster
Ottokar	H.Hechenberger	M.Kurz	R.Winkler	V.Vogel
Czipra	O.Terjuschnowa	A.Gonda	C.Mavroplulou	P.Herbich
Saffi	E.Coelho	R.Vento	R.Renzowa	J.Radek

ずれもフォルクスオーパー第一線の人たちで、1998年、チューパンを歌ったツェドニクやミラベラを歌ったホルム、あるいは大阪に来た時チューパンを歌ったワッサーローフなどは名の通った人たちである。また、指揮者の中でもビーブルはフォルクスオーパー屈指のオペレッタ指揮者である。1989, 1995, 1998年にフォルクスオーパーで「ジプシー男爵」を観た時の私の印象を旅日記から紹介したい。

{1989年秋、エディンバラにおける細胞壁会議ののちボンで研究打ち合わせをし、ウィーンへ寄る}

“9月7日、晴れ、暖かい(昼間ウィーン農科大学を訪れ、夜フォルクスオーパーへ)2階の前から2番目の席で、Erich(註:農科大学の植物学者、筆者の友人)来る。指揮はBiblで、今年の大阪公演と同じ。Barinkayはギリシャ系のZachos Terzakis、ザフィは人気のあるEliano Coello。Czypraは上手でOlga Terkiscjimpva、Zsupanは喜劇で有名なHerbert Prikopa。とにかく音色が綺麗だ。終了後WienerliederのCafe, Schmied-Hanslへ行く。ホテルへ送ってくれる。”

{1998年秋、ポーランドからプラハにおける応力緩和のワークショップに出席、ウィーンへ寄り、そのあとスペインの細胞壁会議へ。ウィーンでは9月22日にレハールの「メリーウイドウ」を観る。}

“9月23日、晴れ。フロイトの家などを昼間訪ねる。ホテルからフォルクスオーパーへ。2階の1列目、1, 2で大変良い席だ。今日の歌手は聴いたことがないが、Czypra, Arseno, Zsupan, Carneroら皆うまい。昨日の「メリーウイドウ」よりはるかに良く、最高の出来だ。”

{1998年秋、プラハにおける流動の国際会議の前後にウィーンに寄る}

“9月12日、雨。(この日、ブラチスラヴァに來ている谷本英一君 {註：筆者の研究室出身者で、名古屋市立大学教授} 來る。昼間Erich夫妻の車でKahlenbergなどに行き、夜はフォルクスオーパーへ。前日は国立歌劇場でRichard StraussのAriadne auf Naxosを観る)

Partierre 3R, P5,6. 変わった演出で、はじめからCarneroもBarinkay出る。Czypraが赤い服で脚を出す。Renate Holm が Mirabella 役。皆声は良いが全くおかしい。しかも長い。谷本君にこれは本来のオペレッタでない、と説明する。Erich夫妻ホテルへ送ってくれる。“

このようなわけで、1998年の「ジプシー男爵」だけは変わった趣向であった。プラハの帰りに寄った時は「こうもり」を観たが、これはオーソドックスな演出と見事な歌と演技だったので、後味良く帰国できた。このタイムスリップのような現代版演出はどうやら今のウィーンで流行しているのであろうか、1998年1月30日に大阪フェスティバルホールで上演されたウィーン・カンマーオーパーの「こうもり」も時を現代とした演出との宣伝であった。これを知ったときは1998年秋のフォルクスオーパーにおける「ジプシー男爵」と同じことか、と落胆したが、実際に観てみると、予想よりはるかに音楽も演出も良かった。ところが、1999年5月8日に衛星中継のテレビ放送を観てがっかりした。このアン・デア・ウィーン劇場で上演された「こうもり」も時代を現代にした演出で、アルノンクール指揮の音楽も歌も出来がもう一つで、筆者は夜中に苦勞して起きて録画までして後悔するほどであった。これが現在のオペレッタ演出の流行であろうか、20世紀の世紀末現象なのかもしれない。ヨハン・シュトラウスの死後100年にあたる1999年のこれらの上演を天国のシュトラウスはどう感じるであろうか。

筆者の持つ全曲レコードで「ジプシー男爵」を歌う人たちは、フォルクスオーパーの舞台ではもはや見られない名歌手ばかりで、「こうもり」同様レコードならではの豪華メンバーである(表9)。ウィーンフィル版が2、ドイツ版が2、そしてイギリスのオーケストラが1であ

表9. 筆者の所持する「ジプシー男爵」全曲レコードの演奏者たち

	? (1)	1954 (2)	1962 (3)	1970 (4)	1975 (5)
Leitung	H.Hollreiser <sup>1</sup>	O.Ackermann <sup>2</sup>	C. Krauss <sup>3</sup>	R. Stolz <sup>4</sup>	F. Allers <sup>5</sup>
Homonay	W. Berry	H. Prey	A. Poell	E.Waechter	H. Prey
Carnero	C.Heater	W. Ferenz	K. Dönch	K.Schmitt- Walter	W.Anheisser
Barinka;y	K. Terkal	N. Gedda	J. Patzak	R. Schock	N. Gedda
Zsupan	E. Kunz	E. Kunz	K. Preger	B. Kusche	K. Böhme
Arsena	A.Rothenberger	E. Köth	E. Loose	L.Schadle	R. Streich
Mirabella	M.Sjostedt	M. Sinclair	S.Leverenz	H.Konetzni	G. Litz
Ottokar	K.Equiluz	J.Schmiedinger	A.Jaresch	F. Gruber	W.Brokmeier
Czipra	H.Rossl-Majdan	G.Burgsthaler Schuster	R. Anday	E.Schartel	B. Cvejic
Saffi	H. Gueden	E.Schwarzkopf	J. Zadek	E. Hazy	G. Bumbry

1:Wiener Philharmoniker, 2:Philhamonia Orchestra London, 3: Wiener Philharmoniker,  
4:Orchester der Deutscher Oper Berlin, 5: Das Orchester der Bayerischen Staatsoper München.

るが、歌い手はウィーン、ドイツの人たちで占められている。とくにクレメンス・クラウス指揮のレコードは品が良く、いかにもウィーン的で筆者は好きであるが、モノラルなのが惜しい。この版ではカール・デンヒがカルネロを歌って貫禄を示している。録音年代の判らないもう一つのウィーン・フィル版はおそらくクラウス版より新しくはないと思われ、ヒルデ・ギューデン、エーリヒ・クンツ、アンネリーゼ・ローテンベルガーらの名歌手が歌っている。これもやはりウィーン情緒に満ちている。イギリス版のアッカーマン指揮のものはヘルマン・プライ、ニコライ・ゲッダ、エーリヒ・クンツ、エリカ・ケート、それにエリーザベト・シュヴァルツコップらの、いわば最高のレコードならではの豪華な顔ぶれを揃えている。また、バイエルンのアラーズ版もヘルマン・プライ、ニコライ・ゲッダ、クルト・ベーム、リタ・シュトライヒ、ウィリ・ブロックマイヤー、ギゼラ・リッツなどと揃えている。この辺りがレコードの楽しみで、舞台とはまた違ったオペレッタの醍醐味である。

### III. 「ウィーン気質」

オペラにしるオペレッタにしる、作曲家はまず台本を得、これに基づき音楽を創るのが一般である。ヨハン・シュトラウスは台本にはあまり恵まれず、そのため、彼の作曲した16ものオペレッタのうち現在でも上演・演奏されるのはわずかに3作品ほどである。この「ウィーン気質」は、台本にシュトラウスが音楽をつけたオペレッタではなく、また彼の他のオペレッタのように自身で指揮をして初演したものでもない。それどころか、このオペレッタが完成し、初演されたとき、シュトラウスはもうこの世の人ではなかった。この2つの意味で、このオペレッタはまぎれもなくシュトラウスの作曲したものではあるが、他の16曲とは全く異なり、そのため前報および本稿ではサテライト扱いにしている。

それにもかかわらず、このオペレッタはウィーンで人気があり、比較的よく上演されるのは、まず第1に曲が美しい、というよりシュトラウスの500に近いワルツやポルカの中のいくつかの名曲から構成された、いわばウィーン市民にもともと親しみやすい音楽から出来上がったものであるからであろう。第2に、このオペレッタは「ヴェネチアの一晩」や「ジプシー男爵」のようにハプスブルク帝国と関係したヨーロッパの社会や政治という、いわば「社会派」の性格をもつオペレッタでなく、せいぜいウィーン会議をからかう程度で、気楽に楽しめるウィーン風の“ゲミュートリヒカイト”(Gemütlichkeit)に満ちたものだからであろう。成功作「こうもり」と似通ったストーリーであることも世紀末のウィーン市民の心を安らげたのであろうか。

#### 1. 「ウィーン気質」の誕生

ウィーンのカール劇場支配人を勤めるヤウナー (Franz Ritter von Jauner) は、同劇場の創立記念のために素晴らしい祝賀のプログラムを考えていた。もともとシュトラウスのオペレッタはほとんどアン・デア・ウィーン劇場で初演され、カール劇場では失敗作「メトウザレムの王子」(Prinz Methusalem)を初演したに過ぎなかった。ヤウナーははじめカール劇場の支配人のまま1875年に宮廷歌劇場支配人に任命され、ワーグナーの楽劇を相次いで上演した。1878



年ヤウナーはカール劇場を辞任したが、そのお別れ公演が上記シュトラウスの「メトウザレムの王子」であった。彼は1880年、宮廷劇場支配人を辞任し、リング劇場の支配人になった。この劇場は1874年に設立されたが、1881年12月8日、オッフェンハッハの「ホフマン物語」上演中に出火、全焼した。このとき脱出できなかった観客数百人が死傷する大惨事となった。支配人のヤウナーはその責任を問われ、4ヶ月の拘禁刑を科せられた。しかし、1895年ヤウナーは再びカール劇場の支配人に迎えらるるに至った（渡辺忠雄、1990）。

彼と劇場総監督のレオン（Victor Leon）は1899年春、一つのアイデアに到達した。すなわち、偉大なるヨハン・シュトラウスの名をもう一度利用しようと。しかし、既に老齢に達したシュトラウスから新しい曲を期待することはできなかったため、アン・デア・ウィーン劇場の脚本家兼指揮者ミュラー2世（Adolf Müller II）に依頼し、シュトラウスの音楽を集め、レオンと、本職は弁護士の脚本家シュタイン（Leo Stein）が音楽に合わせて台本を書くことになった。シュトラウスもこの考えに同意し、協力することになり、計画の実行が始まった。

ところがその5月、シュトラウスは肺炎にかかり、病床に就いてしまった。シュトラウスの了解を得たミュラーは一人でこの大仕事にとりかかった。シュトラウス自身がこのオペレッタのためにどの程度貢献したかは判らないが、この年6月3日に亡くなった。ミュラーはシュトラウスの名曲をあれこれとつなぎ合わせてオペレッタの制作に努力を続けた。たとえば、「朝の新聞」（Morgenblätter, Op.279）、「我が家にて」（Bei uns z'Haus, Op.361）、「酒・女・歌」（Wein, Weib und Gesang, Op.333）、「加速度円舞曲」（Accelerationen, Op.234）、「ウィーン気質」（Wiener Blut, Op. 35）、「うわき心」（Leichtes Blut, Op.319）、「ナポレオン行進曲」（Napoleon-Marsch, Op.156）などが小節単位で盛り込まれているので、聴いていると何か判らぬうちに曲が進行してしまうほどである。しかし、シュトラウスのワルツとポルカを縦横に駆使して作曲したミュラー2世は類い希なる音楽的才能の持ち主であった。ハンガリーからの移民であった父1世から音楽教育を受けたが、父は多くの劇音楽を作曲しており、音楽家としての名声を得ていたため、1827年、ウィーンでベートーヴェンの葬儀の際、棺を運ぶ一人に選ばれるほどであった。この父に学んだ才能ある2世はシュトラウスの持たない劇音楽に対する感性をもっていた（Schumann, 1954）。

また、このオペレッタは19世紀の最後を飾る、「オペレッタ金の時代」に属するものであったが、早くも「銀の時代」の香りを発散させている。一面、この「ウィーン気質」はストーリーが「こうもり」とよく似ているが、「銀の時代」に一步入っているような雰囲気を持っているのは、レオンとシュタインが音楽に合わせて脚本を書いたため、彼らはのちに「銀の時代」の王レハールの、「メリー・ウイドウ」などの脚本を書く脚本家であったからであろう（Schumann, 1954）。

ミュラーの音楽が完成し、レオンとシュタインが歌詞などを曲に合わせて調整し、オペレッタが出来上がったのは1899年10月のことであった。そして10月26日、シュトラウスの74回目の誕生日の翌日、カール劇場において初演された。しかし「こうもり」の初演と同様、評判はもう一つで、1ヶ月の公演がやっとであった。「こうもり」がのちに息を吹き返したのと同様、「ウィーン気質」も復活した。すなわち、3年後、アン・デア・ウィーン劇場が財政危機に陥

ったとき、試みにこの「ウィーン気質」を再演してみたところ、毎日大入り満員で、大変な人気を呼び、劇場の財政はたちまち立ち直ってしまった。こうしてこの「ウィーン気質」は「こうもり」、「ジプシー男爵」と並んでヨハン・シュトラウスの3大オペレッタに数えられるようになった。

## 2. 「ウィーン気質」のストーリー

表10. 「ウィーン気質」の登場人物。

---

イプスハイム・ギンデルバッハ侯爵 (ロイス・シュライツ・グライツの首相) (Fürst Ypsheim-Gindelbach, Premierminister von Reuss-Schleiz-Greiz)
バルトウィン・ツェドラウ伯爵 (同国のウィーン駐在大使) (Gesandter von Reuss-Schleiz-Greiz in Wien)
ガブリエレ (ツェドラウ伯爵夫人) (Gabriele, seine Frau)
ビトウスキー伯爵 (Graf Bitowski)
フランツィスカ・カリアリ (フランツィ、ツェドラウ伯爵の愛人) (Demoiselle Franziska Gagliari)
カグラ (フランツィの父親、クラリネット吹き) (Kagler, ihr Vater, Karusselbesitzer)
ペピ・プライニンガー (お針子、ヨーゼフの恋人) (Pepi Pleininger, Probiermammzell)
ヨーゼフ (ツェドラウ伯爵の従僕) (Josef, Kammerdiener des Gräfin)
御者 (Ein Fiakerkutscher)

---

時代は1814年、ウィーン会議の頃のこと、登場人物は表10のとおりである。オーストリアの近くの小国(架空の國)ロイス・シュライツ・グライツのウィーン駐在大使ツェドラウ伯爵はウィーン娘のガブリエレと結婚した頃はプロイセン風の大変な堅物であったが、ウィーンへ赴任して以来、人が変わり、宮廷劇場の踊り子フランツィを郊外の家で囲っている。括弧内の番号はAug. Cranz Kg, Musikverlag(1957)の楽譜番号を示す(表11)。まず前奏曲はワルツ「ウィーンの森の物語」(G'shichite aus Wienerwald)で始まる。

表11. 「ウィーン気質」の曲番号 (Aug. Cranz Kg, Musikverlag (1957))

---

第1幕	
Einleitung 前奏曲	
1a Entrée	Ich such' jetzt da, ich such' jetzt dort (Josef) ここにも居なけりゃあそこにも居ない。
1b Duett	Pepi! Er? (Franzi, Josef) ペピ、何だお前か。
2 Duett	Grüss Gott mein liebes Kind (Franzi, Graf) ご機嫌よう、可愛い娘さん。
3 Duett	Na also schreib, und tu' nicht schmieren (Graf, Josef) それなら書いてくれ、綺麗にな。
4 Duett	Wünsch' gut'n Morgen, Herr von Pepi (Pepi, Josef) おはよう、ペピ。
5 Finale I	Da ist sie ja! O kruzineser (Franzi, Josef, Minister, Kagler, Graefin, Graf) お出でになったぞ! こいつあ大変!

## 第2幕

- 6 Polonaise Ach wer zählt die vielen Namen (Chor) ああ、こんなにも多くの方々が。  
 7 Duett Das eine kann ich nicht verzeih'n (Gräfin, Graf) どうしても許せないことは一。  
 8 Lied Als ich ward ihr Mann (Graf) 私があいつの夫になったとき。  
 9 Szene und Duettino  
     So nimm, mein süßer Schatz (erst Graf und Pepi, dann Pepi und Josef)  
     さあ、可愛い人、恋文を受け取って。  
 10 Auftritt der Komtessen  
     Bei dem Wiener Kongresse (Damenchor) ウィーン会議のとき。  
 11 Finale II A! Jetzt heisst es operieren (Gräfin, Minister, Franzi, Pepi, Josef, Graf,  
     Chor) さあ、作戦開始だ。

## 第3幕

- 12 Zwischenaktmusik und G'stanzln  
     Geht's und verkauft's mei' G'wand (Pepi, Lizi, Lori) 洗濯女の歌。  
 13 Sextett O kommen Sie und zögern Sie nicht länger! (Frazi, Pepi, Gräfin, Graf,  
     Josef, Minister) さあ、いらして、遠慮なせずに。  
 14 Diuett So wollen wir uns denn verbünden (Franzi, Gräfin)  
     私たちはまた結ばりたい。  
 15 Schlussgesang  
     Wiener Blut, eig'ner Saft (Franzi, Pepi, Gräfin, Graf, Josef, Minister,  
     Chor) ウィーン気質。

## 「第1幕」

伯爵が妾宅にいると思った従僕のヨーゼフは本国からの指令を持ってフランツィの家に行き、旦那様はどこにもいないので探すのは大変、とぼやきながら書類をテーブルの上に投げ出す(1a)。フランツィは仮縫いのため洋服屋のお針子ペピが来たと思って顔を出す。しかし、来たのはヨーゼフだったので、彼女は伯爵がもう5日も彼女をほったらかしてどこかで遊んでいる、とヨーゼフにぼやく(1b)。そこへフランツィの父親で、プラーター公園遊園地でトランペットを吹いているカグラーが来る。彼は今夜ベートウスキー伯爵の館で演奏するのだ、という。娘のフランツィは自分も代役で急に踊ることになったが、衣装を合わせるのにお針子を待っているのに、その娘が約束の時間から2時間も経つのにまだ来ない、と嘆く。そして、それでも5日も来ない伯爵よりまだ、と言う。父のカグラーは伯爵のことを、あの女たらしのカザノヴァめ、と怒る。そこへ伯爵がやってくる。フランツィはここぞと伯爵をとっちめようとする。2人はすぐ仲直りするが、伯爵はヨーゼフが重要書類を持ってきたから、と言いフランツィにキスをして去る(2)。ヨーゼフがやって来て、ウィーン会議のために首相のギンデルバッハ侯爵が自ら来るが、ロシア皇帝にならって替え玉を使って画策するよう、という命令であることを伯爵に伝える。伯爵は、暫くあずまやで考えようと、書類をそこへ持参するようヨーゼフに命ずるが、実は今夜のベートウスキー伯爵の夜会に妻を連れて行かねばならないことになったので洋服屋に寄ったところ、そこで可愛いお針子ペピに会って、彼女に一目惚れしてしまった、と言う。どうすれば彼女を口説き落とすことが出来るかと、伯爵はヨーゼフに相談する。ヨーゼフは、彼女をヒーツィングに誘ったらどうでしょう、と入れ知恵する。そして伯爵の言うとおりに、ヨーゼフはこのお針子(実はヨーゼフの恋人)への恋文を代筆する(3)(図20)：

**Langsames Walzer-**

*Graf* *p*

Du süs - ses Zu - cker-

*1. Viol.*

*Str. Ob. pp* *1/2 Tr.*

*Org. u. Kl.*

**Tempo**

*G.* *1. Fl.* *1. Ob.*

täu - berl mein, o komm', o komm', zum Stell - dich - ein, ich

*1/2 Tr.* *1/2 Nr.*

*G.* *1. Fl.* *1. Ob.*

wart' bei dem be - stimm - ten Platz, ich bitt' Dich, komm', Du lie - ber

*1/2 Tr.*

*rit.*

*G.* *rit.*

Schatz! O komm' doch, komm' zum Stell - dich - ein, ich bitt' Dich, sag' mir

図20. 「ウィーン気質」第1幕(3)「可愛い小鳩」のピアノ・スコア部分。

20-2

a. *a tempo*

ja nicht nein! Hab' Dich ja so lieb, so lieb, Du sü ßer

*atempo*  
Kl.

a. *f* *mf* *cresc.*

Her - zens - dieb, ich hab' Dich ja so lieb, so lieb, Du

*f* *mf* *cresc.*

*fz*  
*3 Pos.*

a. *f* *mf*

sü - Ber Her - zens - dieb!

**Josef**

Jetzt hat sie's schwarz auf

*f* *mf*

*fz* *Tutti* *mf*

*Ob. Cl.* *1. Viol.*  
*Str. Qu.* *4 Hör.*  
*Fag.*

*pk.* *Kl. Tr.*

Du süßes Zuckertäuberl mein,	蜜より甘い私の小鳩、
O komm', o komm', zum Stell dich ein,	おお来たれよ、ランデヴーに来たれ、
Ich wart' bei dem bestimmten Platz,	約束の場所で待っています、
Ich bitt' doch, komm', du lieber Schatz!	必ず来て下さい、我が愛しの君よ
O komm' dich, komm' zum Stell dich ein,	おお来たれよ、ランデヴーに来たれ、
Ich bitt' doch, sag' mir ja nicht nein!	“ノー”と言わないで、“イエス”と答えて、
Hab' dich ja so lieb, so lieb,	君を心から愛しています
Du süßer Herzens dieb,	君が奪った私の心を、
Ich hab' dich ja so lieb, so lieb,	君の手に直接受け取って下さい。
Du süßer Herzens dieb!	愛する愛する君よ！

伯爵は恋文をヨーゼフに託し、陽気に去る。ヨーゼフは、あの堅物の伯爵がウィーンで変わったものだ、まるで自分は主人のレポレロ（モーツァルト、カタログの歌）のようだ、と歌う。入れ替わりにフランツィお待ちかねのお針子ペピが来る。ペピはヨーゼフの恋人である（4）。フランツィ現れ、服は出来たかと訊ねるが、彼女でなく、ペピに合ったドレスであったので、フランツィは彼女の代わりにペピに舞踏会に出てくれ、と頼む。ペピがすっかり喜んで浮かれているとヨーゼフがやってくる。2人が楽しく語り合っているところへ首相が馬車に乗って到着するが、御者と馬車賃のことで喧嘩をする。ヨーゼフに伯爵は居るかと言ねるが、留守だと答えると、夫人に挨拶したいと首相が言う。ヨーゼフは慌てて夫人も留守だと答えると、そこへカグラーが現れる。カグラーは、娘が伯爵と結婚すると思いきこんでいるので、娘なら家に居るではないか、と横から口を出す。「あなたはどなたか」と首相に訊かれたカグラーは父親です、と答える。首相は、1時間ほど前に伯爵が女性（実はガブリエレ夫人）と外出しているのを見かけたので、もうそろそろお帰りかと、訪ねてきたのだ、と告げる。カグラーは、それはおかしい、娘はずっと屋敷に居た、と言う。首相は、さては伯爵と一緒にいたのは彼の愛人か、と誤解してしまう。そこへフランツィが現れ、首相は彼女を夫人と信じてしまう。ここで人違いの混乱が始まる(5)。首相は伯爵夫人と思っているフランツィに、愛人を持つ伯爵はけしからんと勘違いしてフランツィに同情する。屋敷の外で、乗馬服を着た本物の伯爵夫人がこっそりとやってくる。彼女は伯爵が愛人を囲っていると疑い、様子を見に来たわけである。そして夫人は伯爵との楽しかった新婚時代を思い出して歌う。実はこの屋敷は彼らが新婚時代に住んだところで、今は愛人が住んでいるわけである。そこへ首相が出てきて夫人を見て、彼女を愛人と思っているので、ここで鉢合わせをして伯爵が窮地に陥るのはまずいと考へ、首相は伯爵夫人を自分の妻である、とフランツィに紹介する。そこへ伯爵が出てくるので、首相は彼に忠告し、夫人を伴ってこの場を去る。

「第2幕」

ビートウスキ伯爵の夜会はシェーンブルン宮殿に似た屋敷で開かれ、ヨーロッパ中の政治家、外交官、貴顕紳士、淑女が集まっている。こんなに沢山のかたがたが集まって、と一同歌う。ペピの踊りも素晴らしく、ビートウスキ伯爵は感に打たれる。そこへツェドラウ伯爵が

来て、昼間別荘にいた女性は誰か、と問いつめるガブリエレの弁解している(6)。舞踏会場で伯爵はペピに恋文を受け取り、返事をくれるよう頼んで去る(9)。ペピは手紙を開いて読もうとすると、書かれている文字に見覚えがある。それはまさに彼女の恋人ヨーゼフの筆跡である。そこへヨーゼフが現れる。一緒に楽しもうと言うが、ヨーゼフは伯爵を捜さなくてはならないから忙しい、と言う。ペピは怒って、もう知らない、私は他の人と楽しむからあなたも他の女の人の所へ行きなさい、と機嫌を悪くする。そこへ伯爵がフランツィと現れる。彼女は首相が彼女を夫人と誤解したのだから、この夜会で私を夫人として紹介してほしいと伯爵を困らせる。そこへビートウスキ伯爵が現れ、魅力的な腕を貸して下さい、と2人で腕を組んで行ってしまう。伯爵は自分にはまだお針子の可愛い子ちゃんがいる、と思い、結婚した頃の野暮な自分が変わったことを思い出す(8)。そこへヨーゼフが駆け込んできて、夫人がここへ来ると伯爵に告げると、実際に夫人が現れ、一悶着するが伯爵は言い逃れ、ようやく2人は仲直りし、「ウィーン気質」を歌う(7)。このあたりは演奏によって順序が多少変わる。互いの誤解と混乱の原因は、{あ} 首相が別荘にいたフランツィを伯爵夫人と信じ、夫人ガブリエラをカグラの娘で、伯爵の愛人と思った、{い} 伯爵夫人ガブリエラはペピをカグラの娘(フランツィ)と思った(フランツィの代役で踊ったから)、{う} フランツィはガブリエラを伯爵の別の愛人と思った、ことなどである。

ワルツの音楽の中、ビートウスキ侯爵が歓迎の挨拶をする。ウィーン会議になぞらえて歌が流れる(10)。首相は伯爵の問題をどう解決しようかと頭を悩ませているところへカグラが現れたので、「あなたの娘婿には愛人がある」と告げる。首相はそこへやって来た夫人をカグラに指し示し、「あれが彼女だ」と教える。カグラは夫人の所へ行き、「あの男(伯爵)と別れてやって下さい。あの男には将来を誓った女(フランツィ)がいる」と頼む。夫人は「あなたはどなたですか」と知らぬ顔で去る。ペピはヨーゼフのことに恨み言を言いながらシャンパンを飲んでいる。そこへ伯爵が現れ、ペピは11時にカジノへ行くと言って伯爵に接吻して去る。この光景を伯爵夫人が見てしまう。

あなたにはいろいろ隠し事があるのでしょうか、と聞いて夫人は去る。伯爵は夫人を呼び止めようとするが、入れ替わりにフランツィが現れ、ヒーツィングへ今夜連れて行って欲しいと頼む。伯爵は、首相と用事があるから、と断って去る。そこへヨーゼフが伯爵を捜して現れ、彼女に伯爵は他の女性と出かけると言っていたと口を滑らせる。ヨーゼフが去り、首相が現れ、さらに伯爵夫人も現れ、いよいよフィナーレが近づく(11)。

まず伯爵夫人と首相が近づき、彼女に惹かれる首相は一緒にヒーツィングに行くとうわくわくする。そこへフランツィが現れ、首相は両者を紹介する。そこへペピまで現れ、首相も混乱する。3人の女性が揃ったところへ首相が現れる。こうして3人の女性はお互いに知らず、首相も誤解したまま主宰者のビートウスキ伯爵が夜会開会の挨拶をし、今夜はツェドラウ伯爵夫人を紹介する、と言い、夫人がそれに答え、一同大いに驚く。

### 「第3幕」

シェーブルン宮殿近くのヒーツィング・カジノの庭。遠くにウィーンの町の灯が見える。店の主人が今日はランナーが演奏します、とアナウンスする。ここでペピたちが「洗濯女の歌」を歌う(12)：

Geht's und verkauft's mei G'wand,  
 i' fahr' in Himmel,  
 Wann d' Geigen fiedeln wienerische Liedeln!  
 Geht's und verkauft's mei' G'wand,  
 i' fahr' in Himmel!  
 Beim Wiener Tanz vergisst man d' Sorg ganz!

行って私の着物を売っておしまい、  
 ヴァリオリンがウィーンの歌を  
 優しく奏でるとき！私は天国にいる。  
 行って私の着物を売っておしまい、  
 天国に行って、  
 ウィーンで踊れば、この世はすてき。

続いて「洗濯女の歌」同様、ワルツ「我が家にて」(Bei uns zu Haus, Op.361)の主題で彼女らはこのオペレッタの時代背景になっているウィーン会議をからかって歌う：

Der Wiener Kongress, der dauert schon lang,  
 Täglich a Ball, a Galaempfang  
 Man hört kein Wörtchen von Politik  
 So Kongress ist a Glück.  
 Und unsere Minister, statt zu regieren,  
 Müssen als Hausherren repräsentieren.  
 Sehn's Ministerium net mit an Blick  
 So Kongress ist a Glück.  
 Die Herren Europas, man kann's versteh'n,  
 Tun sich fidel im Walzertakt dreh'n.  
 Wer in Wien tanzt, der denkt an kan Krieg  
 So Kngress ist a Glück.

ウィーン会議はいつ果てるとも知らず、  
 毎日毎晩パーティーばかり。  
 一体政治の話はしているのかしら  
 こんな会議は楽しい限り。  
 大臣方は本職忘れ  
 もっぱらお客の世話ばかり  
 ご嫌とるのに大わらわ  
 こんな会議は楽しい限り。  
 会議に来られたお偉いさんたちは  
 陽気になってワルツに酔って  
 ウィーンで踊れば天下太平(戦争はない)  
 こんな会議は楽しい限り。



図21. 「ウィーン気質」第3幕の一 (Christl Schwindの劇場影絵)。ヒーティングのカジノの場面。



人々は三々五々とカジノへやってくる。伯爵夫人と首相が手を取り合って現れ、首相は夫人にここへ来た理由を訊く。夫人は伯爵の逢い引きの現場を押さえるため、と言う。2人は人に見られない四阿へ入る(13)。伯爵はペピを探しに現れ、フランツィはヨーゼフを連れてやってくる。この2人も四阿に隠れ、そこへペピが現れ、伯爵は漸くペピと会う。こうして3組がそれぞれ四阿へ入り、シャンパンを飲む。ペピを口説く伯爵の声を聞いたフランツィは伯爵が他の女性と逢い引きしていることを知る。彼女は伯爵のいる四阿を探しに出るが、ヨーゼフも伯爵と恋文の相手を捜しに出る。彼は伯爵の四阿を探し当て、戸を開けると、そこに居たのは彼の恋人ペピであった。「お前はこんなところで何をしているんだ」と詰ると、ペピは「私があるあなたの字が判らないとおもうの？あなたには他の女性がいるので、私が伯爵様と一緒にいるところを見たら、それを口実に別れようというのでしょうか」と争いが始まる(図21)。酔っぱらったペピは怒って去り、そこへ酔っぱらってやってきたカグラーとヨーゼフがやりとりしているところへ伯爵夫人が現れる(13)。伯爵夫人が四阿に座っていると伯爵が偶然現れ、何気なく「今晚は」と言って見ると自分の妻だった。こうして伯爵と夫人は仲直り(14)し、そこへ仲直りしたペピとヨーゼフもやってくる。そして首相とフランツィも仲良く現れ、一同めでたく乾杯し(15)、伯爵と夫人は「ウィーン気質」を歌う(図22)：

Wiener Blut, Wiener Blut, eig'ner Saft, ウィーンの血潮、ウィーン気質！

Voller Kraft, voller Glut! 精気にふれ、熱情に満ちる！

Wiener Blut, selt'nes Gut, ウィーン気質、それh特別、

Du erhabst und belebst unsern Mut! あなたを力づけ、活気づける！

.....

このオペレッタには以下のようなシュトラウスの曲がふんだんに盛り込まれており、楽しめる。例えば、ワルツ「ウィーンの森の物語」(前奏曲)(G'schichten aus Wienerwald, Op.325)、ポルカ「愛の使者」(1a)(Liebesbotschaft, Op.394)、ポルカ「舞踏会の花束」(1b)(Ballsträusschen, Op. 380)、ワルツ「文芸欄」(“)(Feuilleton, Op.293)、ポルカ「町と田舎」(Stadt und Land, Op.322)、「ネヴァ・ポルカ」(3)(Newa-Polka, Op.288)、ワルツ「チトロンの花咲く園」(“)(Wo die Citronen blüh'n, Op.364)、ワルツ「新しいウィーン」(“)(Neu-Wien, Op.342)、ポルカ「百発百中」(5)(Freikugeln, Op.326)、「アンネン・ポルカ」(8)(Annen Polka, Op.117)、ポルカ・マズルカ「女性賛美」(11)(Lob' der Frauen, Op.315)、ワルツ「楽しめ、人生を」(“)(Freut euch des Lebens, Op. 340)、ワルツ「酒・女・歌」(“、12)(Wein, Weib und Gesang, Op.333)、ポルカ「観光列車」(11)(Vergnügungszug, Op. 281)、ワルツ「美しく青きドナウ」(“)(An der schönnn, blauen Donau, Op.314)、ワルツ「朝の新聞」(“)(Morgenblätter, Op.279)、「トリツチ・トラツチ・ポルカ」(13)(Tritsch-Tratsch-Polka, Op.214)、など。また、演奏によってはバックグラウンド・ミュージックでラナーの美しいワルツ「ロマンティックな人々」(Lanner, Josef: Die Romantiker, op. 167)を演奏することもある。

このように、このオペレッタのために台本に作曲されてものでなく、500曲に近いシュトラウスの曲の中から選んで作り上げられたオペレッタであるので、耳になじんでいる反面、いかにも継ぎ接ぎの印象は免れない。

The image shows a musical score for the piano part of the waltz "Wiener Charakter" (Op. 354) from Act 3, Finale. The score is in 3/4 time and features a piano accompaniment with a waltz tempo. The lyrics are in German, and the score includes vocal lines for the Countess (Gräfin) and the Count (Graf).

**Gräfin**  
**Graf**  
**Piano**

**Walzer**  
 3/4 T.  
 p

Wie - ner Blut ———— Wie - ner  
 Wie - ner Blut ———— Wie - ner

Blut ———— eig' - ner Saft, vol - ler Kraft, vol - ler Glut! ———— Wie - ner  
 Blut ———— eig' - ner Saft, vol - ler Kraft, vol - ler Glut! ———— Wie - ner

Blut, ———— self' - nes Gut, ———— du er - hebst und be - lebst un - sern Mut!  
 Blut, ———— self' - nes Gut, ———— du er - hebst und be - lebst un - sern Mut!

1. Nr.  
 1. Ob.  
 42 Viol.  
 42 Cl.  
 Str. Qu.  
 42 Trp.  
 Str. u. Tr. pp

図22. 第3幕フィナーレのワルツ「ウィーン気質」(Op. 354)のピアノスコア部分。  
 伯爵と伯爵夫人の2重唱。

### 3. 「ウィーン気質」の音楽

筆者はこのオペレッタの上演を2回しか観ていない。いずれも1982年のことで、1回は同年6月、大阪フェスティバルホールにおいて講演されたウィーン・フォルクスオーパー (Wiener Volksoper) によるもの、そして8月、シェーンブルン宮殿 (Schloss Schönbrunn) の宮廷劇場 (Schlosstheater Schönbrunn) でウィーン・カンマーオーパー (Wiener Kammeroper) によるものであった (表12)。このシェーンブルンの宮廷劇場でオペレッタが

表12. フォルクスオーパー (大阪フェスティバル・ホール) とウィーン・カンマー・オーパー (シェーンブルン宮殿宮廷劇場) の演奏者。

	フォルクスオーパー	カンマーオーパー
指揮者	Rudolf Biebl	Adolf Winkler
首相(Fuerst Ypsheim-Gindelbach, Premierminister von Reuss- Schleiz-Greiz)	Karl Dönch	Bruno Thost
ツェドラウ伯爵バルドウイン (Balduin, Graf Zedlau)	Peter Minich	Karl Lobensommer
同夫人ガブリエレ(Gabriele)	Sylvia Holzmayer	Milly Rudifieria
フランツイ(Demoiselle Fanziska Cagliari, Taenzerin im Kaerntnertor)	Elisabeth Kales	Angelika Schmid
カグラー(ihr Vater, Karusselbesitzer)	Rudolf Wasserlof	Hermann Patzalt
ペピ(Pepi Pleininger, Probiermamsell)	Guggi Löwinger	Brigitte Prammer
伯爵の従者ヨーゼフ(Josef, Kammer- diener des Grafen)	Kurt Huemer	Frederic Grager

上演されるのは珍しく、ここで「ウィーン気質」を観ることができたのは全く幸運であった。たまたま1999年1月にこのウィーン・カンマーオーパーが来日し、大阪フェスティバルホールで「こうもり」を上演したが、1982年の「ウィーン気質」を演じた人たちとは全く異なっていた。また、筆者は「ウィーン気質」の全曲レコードを3種類所持しているが (表13)、それぞれ特徴があり、楽しめる。

表13. 全曲レコードの演奏者

	Electrola	Eurodisc	Denon(PCM)	EMI
指揮者	Otto Ackermann	Robert Stolz	Rudolf Bibl	Willi Boskovsky
首相	Karl Dönch	Benno Kusche	Karl Dönch	Klaus Hirte
伯爵(バルド ウイン)	Nicolai Gedda	Rudolf Schock	Adolf Dallapozza	Nicolai Gedda
夫人(ガブリ エレ)	Elisabeth Schwarzkopf	Hilde Gueden	Sigrid Martikke	Anneliese Rothenberger
フランツイ	Erika Köth	Margit Schramm	Elisabeth Kales	Renate Holm
カグラー	Alois Pörnerstorfer	Erich Kunz	Wolfgang Kandutsch	Hans Putz
ペピ	Emmy Loose	Wilma Lipp	Helga Papouschek	Gabriele Fuchs
ヨーゼフ	Erich Kunz	Ferry Gruber	Erich Kuchar	Heinz Zednik
オーケストラ	Philharmonia Orchester	Die Wiener Sym- phoniker	Volksoper- orchester	Philharmonia Hungarica

まず、シェーンブルン宮殿とこの特別な宮廷劇場について説明したい。

#### [シェーンブルン宮殿]

この名の由来は「美しい泉」(schöner Brunn)がこの地に発見されたことによるという(Ellmerer, 1993)。宮殿の広大な庭の両側に斜めに伸びる2つの道を辿るとそれぞれに泉がある。14世紀には狩猟用の森と放牧地であったこのあたりは変遷を経て16世紀、狩猟好きな皇帝マクシミリアン2世(Maximilian II)によって買い取られ、ハプスブルク家のものとなった。この父同様に狩猟好きであったマティアス(Matthias)は狩りの途中喉が乾き、偶然にこの泉を見つけたと伝えられる。ここに城館が建てられたのが17世紀半ばであったが、1683年、オスマントルコ軍による第2次ウィーン包囲の際、周囲の村と共に焼き払われた。しかし、レオポルト1世(Leopold I)は息子のヨーゼフ1世(Josef I)のために豪華な離宮の建設をすることを決定し、ここに1696年、壮大な宮殿の建設が着工の運びとなった。はじめ、現在のグロリエッテ(Gloriette)の丘の上に建てるよていであったが、経済的に無理であることになり、現在の場所に宮殿が建つことになった。フランスのヴェルサイユ宮殿をモデルにしたとも言われるが、左右対称に構成された前庭とファッサードは北側外部に面し、反対側は広大なフランス風庭園に面している(図23)。

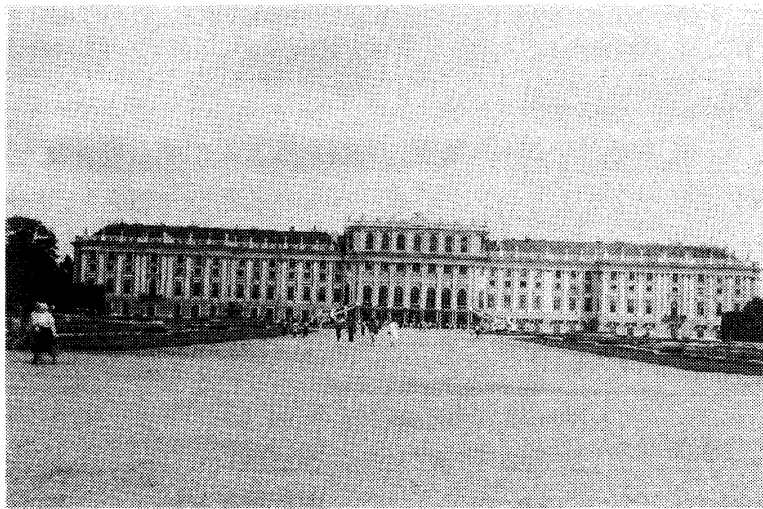


図23. 中庭から見たシェーンブルン宮殿(筆者撮影)。宮廷劇場は左手向こうの翼の突き当たりにある。

1717年、カール6世の長女として生まれたマリア・テレジア(Maria-Theresia)は1736年、ロートリンゲン公フランツ・シュテファン(Franz-Stephan von Lothringen)、後の皇帝フランツ1世、と結婚し、この宮殿を居城とした。のちに宮殿はロココ様式で改築され、さらにこの女帝が1780年に死去するまで、宮殿は改築を続けた。啓蒙君主として名高い息子のヨーゼフ2世(Joseph II)は科学に関心が深く、1752年以後、動物園などを敷地内に建てた。そして、ナポレオン戦争の時代にはこの宮殿はヨーロッパ政治の中心舞台となった。

ウィーンを占領したナポレオンは皇女マリールーズ (Maria Louise) を后とし、1805年に2週間、1809年には半年間この宮殿に住んだ。そして、1811年ナポレオン2世が生まれた(1832年、21歳で肺疾患のため夭折した)。その揺りかごが現在も宮殿内に置かれている。ここはナポレオン後のウィーン会議が行われたところでもある。

1830年、後の皇帝フランツ・ヨーゼフ (Franz-Joseph) がこの宮殿で誕生し、1848年、革命の最中に即位式が行われた。そして、1854年、ドイツ・バイエルンの皇女エリーザベト (Elisabeth) との結婚式もここで執り行われた。その後、プロシヤオーストリア戦争後のドイツ統一、万国博覧会 (この時、雨樋用のパイプを骨組みにした壮大な温室が建てられた)、第一次世界大戦、という激動のヨーロッパで長く皇帝の地位に留まり、市民の敬愛的でもあったフランツ・ヨーゼフはこの宮殿で1916年86歳の生涯を終えた (Wandruszka, 1968)。第一次世界大戦後の1918年11月、オーストリア最後の皇帝カール1世はシェーンブルン宮殿で皇帝の地位を退き、共和国が宣言された。ついで第二次世界大戦後、敗戦国オーストリアは米英仏ソの4国に占領され、4国の管理下に置かれ、イギリス軍の総司令部がこの宮殿におかれた。1955年、4国による占領が解かれ、オーストリア独立の祝典がこの宮殿で行われた。

#### [宮廷劇場]

さて、ウィーンで唯一残るバロック風の劇場であるこの宮廷劇場 (Schlosstheater Schönbrunn) であるが、宮殿の北西の角、道から前庭と宮殿を見て右手前にある。本来ハプスブルク家の劇場で、皇帝一家が音楽を聴き、オペラを観るためのものとして1779年に建設されたものであった。マリア・テレジアの娘で、ルイ16世に嫁いだマリー・アントワネット (Maria Antoinette) はここの舞台上で踊ったという。ハイドンやモーツァルトもここで指揮をし、モーツァルトのオペラもここで上演された。現在は夏にコンサートやオペラが演奏され、一般にも開放されているようである。収容人員わずかに200名ほどの実に小じんまりしているがバロック風の豪華な劇場で客席に座ると、まるでマリア・テレジアの時代に戻ったかのような気分がした。筆者が同劇場に行った1982年のシーズンには「ウィーン気質」のほか、やはりウィーン室内歌劇による2つのオペラ、あるいはジングシュピール (Singspiel) が上演されていた。一つはモーツァルト12歳の時の作品「バスティアンとバスティエンヌ」 (Bastien und Bastienne)、もう一つはハイドンの「薬局」 (Der Apotheker) であった。このイタリア風オペラはハイドンがエステルハージー (Eszterhaza) 家に仕えていた1768年、同家で初演されたものである。

#### 「ウィーナー・カンマー・オーパー」

この豪華だがこじんまりした宮廷劇場で観たカンマー・オーパーによる「ウィーン気質」はオーケストラも小編成で、全体としてはこじんまりした演奏をするが、その演奏の質は高い。当日の筆者の日記を見ると、“すばらしい音楽と演技であったが、とくにPepiを歌ったBrigitte Prammerは少々太りすぎだったが、声は最高であった” とある。

このオペラ劇場は1953年に創設された、この國で唯一の私立歌劇団で、市の中心にある。もともと若いオペラ歌手のために創設され、従来からある国立の歌劇場であまり上演されないジングシュピールやオペラ、オペレッタを上演し、ウィーンの音楽的ルネサンスに寄与してきた

と言われる。普断は市内にあるこの歌劇場で上演し、夏、他の劇場が休みの時、宮廷劇場で上演することになったという。前述のとおり、日本を含め、海外にも進出するようになった。このオーケストラは典型的な小編成のサロン・オーケストラであるが、音色と響きは大編成に引けを取らないくらいである。また、この歌劇団の歌手たちにはオーストリア、ドイツ以外の人が多いといわれるが、この町に住み、ウィーンの音楽を演奏しているうちに「ウィーン気質」が身に付いている、とも言われている。

すでに前報（増田芳雄、1998）の「こうもり」で紹介したように、フォルクスオーパーは長い伝統を持ち、優れたオーケストラ、指揮者、そして著名な歌手を揃えている。大阪で上演された「ウィーン気質」も手慣れたもので、表12に示すフォルクスオーパーの名歌手とビーブルの指揮でシュトラウスの音楽を存分に楽しめた。

### 「レコード」

3種類の全曲レコードが出ているが、それぞれに特徴がある（表13）。DENON(PCM)のレコードはフォルクスオーパーの日本公演の内、東京公演の演奏をライブ録音したものであるが（1982）、達者な歌手たちが手慣れた演奏をしている。Eurodiscの盤はオペレッタの巨匠で1975年に亡くなったシュトルツの指揮であるから、おそらく1970年代初めに演奏されたものであろう。ヒルデ・ギューデンら豪華な歌手を揃えた演奏である。Electrola盤は、オペレッタ・レコードを多く出しているアッカーマンのフィルハーモニア・オーケストラによる、やや古い演奏であるが（1954）、シュヴァルツコップやエリカ・ケートなどの登場する貴重なものである。

しかし、筆者のもっとも愛好する盤はボスコフスキー指揮のフィルハーモニア・フンガリカ（Philharmonia Hungarica）の演奏で（EMI）ある。1976年の録音で、ゲッダ、ローテンベルガー、ホルム、らレコードならでの豪華メンバーで、さすがにボスコフスキーの指揮はこのオペレッタを極めて上品に、しかしウィーン情緒に溢れた最高の演奏である。

### むすび

何がオペラで何がオペレッタであるかは、その成り立ちにもよるのであろうが（増田芳雄、1998）、境界はあまりはっきりしない。オペラの中にもモーツァルトの「フィガロの結婚」（La Nozze di Figaro）、ロッシーニの「セヴィリアの理髪師」（Il Barbiere di Seviglia）、ドニゼッティの「愛の妙薬」（l'Elisir d'Amore）、あるいはリヒャルト・シュトラウスの「薔薇の騎士」（Der Rosenkavalier）などは音楽もストーリーもオペレッタ的である。

一般にオペレッタのストーリーは他愛のない、非現実的な、男女の3角、4角関係の絡んだ陳腐なものが大部分であるが、ドタバタの挙げ句にハッピーエンドになるのがお定まりである。しかし、銀の時代を代表するレハールのオペレッタは、代表作「メリー・ウイドウ」（Die lustige Witwe）を除き、他はまるでヴェルディーのオペラのように悲劇である。すなわち、「パガニーニ」（Paganini）、「フリーデリケ」（Friederike）、「微笑の國」（Das Land des Lächelns）、あるいは「ジュディッタ」（Juditta）などである。これらのレハールのオペレッタが果たして

日本語で「喜歌劇」と呼ばれるものの範疇に入るかどうかには疑問が残る。

いわゆる金の時代のオペレッタは大きく分けると、(1)ギリシャ神話を題材にしたもの、たとえばオッフェンバックの「地獄のオルフェウス」または「天国と地獄」(Orpheus in der Unterwelt)、「美女ヘレネ」(Die schöne Helena)、ズッペの「美しきガラテア」(Die schöne Galathee)など、(2)当時の複雑な政治的、民族的葛藤を背景にしたもの、たとえば本稿で紹介したシュトラウスの「ジプシー男爵」(Der Zigeunerbaron)、ミレッカーの「乞食学生」(Der Bettelstudent)や「ガスパローネ」(Gasparone)、そして(3)「こうもり」(Die Fledermaus)や「ウィーン気質」(Wiener Blut)を代表とする他愛のないストーリーを扱ったものに分けられるのではないか。これらは一般に喜劇的要素が強く、「ジプシー男爵」や「乞食学生」のように喜劇的とは言えないまでも、少なくともハッピーエンドで終わるものはオペレッタの範疇に入るであろう。そのオペレッタの伝統は20世紀の銀の時代にも受け継がれ、オスカー・シュトラウスの「ワルツの夢」(Ein Walzertraum)、レハールの「メリー・ウイドウ」(Die lustige Witwe)、カールマンの「チャルダッシュの女王」(Die Csardásfürstin)、ペナツキーの「白馬亭にて」(Im weissen Rössl)あるいはシュトルツの「2人の心は4分の3拍子」(Zwei Herzen im Dreivierteltakt)、などの名曲が世に出た。

前報および本稿で紹介したのは、ヨハン・シュトラウスの代表的なオペレッタ16曲プラス1曲の中の成功した少数のオペレッタであるが、それぞれ性格を異にし、ストーリーも音楽も互いにかなり異なるように聞こえる面がある。前報「こうもり」と本稿の「ウィーン気質」は他愛のない、むしろ懐古的、享樂的な性格をもっているが、「ヴェネチアの一夜」はシュトラウスの、イタリアとモーツァルトやロッシニのオペラに対する憧れのようなものを感じさせる。そして「ジプシー男爵」は19世紀も終わりに近く、多民族を抱えるウィーンとオーストリア・ハンガリー二重帝国のもつ多くの問題点、そして近隣諸国との戦争を扱ったかなり政治的な内容を盛ったオペレッタと言える。しかし、すべてに一貫しているのは彼の特有の美しいポルカであり、ワルツである。もっとも、シュトラウスは保守的な父シュトラウスと異なり、革命支持者であったが、とくに政治に関心を持っていたとは思えない。寧ろ、彼の気に入った台本に曲を付けただけであろうが、シュトラウスの美しい音楽と共に当時の聴衆の関心がこれらのオペレッタを名作にしたのであろう。彼の死後に完成し、初演された「ウィーン気質」が現在でも人気を保っているのは、オペレッタとしての優秀さというより、シュトラウスの音楽の美しさを人々が今も愛していることの証明であろう。

謝辞 本稿を書くにあたり、ウィーン弁を多く含む歌詞のいくつかを歌唱から書き取り、意味するところを説明してくれた畏友の令嬢 Dr. Elisabeth Hüblに感謝する。

## 引用文献

- 軍司 貞則 (1982) 滅びのチター師。文芸春秋社。
- 塩野 七生 (1982) コンスタンチノーブルの陥落。新潮社。
- 白石 隆生 (1976) ヴェネチアの一夜。BMGビクター。
- 陣内 秀信 (1992) ヴェネツィア — 水上の迷宮都市。講談社現代新書 (講談社)。
- 増田 芳雄 (1998) ウィーンのおペレッタ I.ヨハン・シュトラウスの“こうもり”  
(Die Fledermaus) について。人間環境科学7:75-129.
- 渡辺 忠雄 (1987) ウィーン・オペレッタ物語。シュトラウシアーデ (日本ヨハン・シュトラウズ教会) 11:41-50。
- 渡辺 忠雄 (1990) ウィーン・オペレッタ探訪。オール出版。
- Barth, H. V. (1996) Johann Strauss: Eine Nacht in Venedig (BASF Aktienges/Polytel. Intern.) Budapest.
- Bloch, Jales (1969) Tsiganes (木内信敬訳: シプシー。文庫クセジュ。白水社、1973)。
- Ellmerer, Beate (1993) Schloss Schönbrunn Kultur- und Betriebsges. M.b.H. Gerhard Trummler, Wien (和訳: シェーンブルン宮殿と庭園のアルバム)
- Masuda, Y. and E. Hübl (1997) People's life and music in early 20<sup>th</sup> century. 帝塚山短期大学紀要 34: 141-165.
- Schumann, Karl (1954) Wiener Blut.EMI Elektrola. Druckhaus Maack KG.
- Wandruszka, Adam (1968) Das Haus Habsburg. Die Geschichte einer europäischen Dynastie. Köln. (辻村 洋訳「バプスブルク家。ヨーロッパの一王朝の歴史」谷沢書房、1982)
- Wurz, A. (1978) Reclams Operettenführer. Philipp Reclam Yb, Stuttgart.
- Wurz, A. (1980) Johann Strauss: Eine Nacht in Venedig. Operetta in drei Akten. Philipp Reclam Un. Stuttgart.



演奏者索引。(V)はフォルクスオーパー専属、{I}は前報(増田芳雄、1998)に紹介。

### Dirigent 指揮者

**Ackermann, Otto** アッカーマン

1903年、ルーマニアのブカレストで生まれた。ジョージ・セルらに学び、15歳の時、早くもルーマニア・オペラアンサンブルを指揮した。1927-1932年、デュッセルドルフのオーケストラ、1932-1935年にブリュン、1935-1946年にベルンで演奏活動をし、スイスの市民権を得た。1947-1952年にはウィーン・フォルクスオーパーの主席指揮者を勤めた。さらに1953-1958年にドイツのケルン、そしてチューリヒの歌劇場に移り、51歳という若さで1960年に亡くなった。その演奏原理は、歌手の歌唱を最大に発揮させることであったという。アッカーマンの指揮する多くのオペレッタがレコードで残されている。

**Allers, Franz** アラーズ

チェコ生まれ。21歳で早くもオペレッタを指揮した。1年後にバイロイト音楽祭でトスカニーニの助手を勤め、23歳で「薔薇の騎士」を指揮した。しばしばアメリカに招かれ、1963年以後、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場の指揮者を勤めている。

**Boskovsky, Willi**{I} ボスコフスキー

**Biebl, Rudolf** (V) {I} ビーブル

**Leitner, Konrad** (V) ライトナー

グラーツ生まれ。ウィーンで学び、1969年ウィーン国立歌劇場に歌唱の教師として勤めたが、1981年「カール・ベーム指揮者コンクール」入賞し、以後カール・ベームの最後の助手を勤め、ザルツブルクでウィーンフィルハーモニーを指揮、以後ドイツ各地の歌劇場で指揮した。1986年、「魔笛」でフォルクスオーパーにデビューし、以後、同劇場で多くのオペレッタを指揮して現在に至っている。

**Märzendorfer, Ernst** メルツェンドルファー

ザルツブルク近くのオーベルンドルフで生まれた。まず1940年にグラーツの歌劇場で指揮者としてデビューしたのち、1951年からグラーツのコンサーヴァトリウムの指揮科で教えた。1958年にベルリン国立歌劇場に招かれ、さらにウィーン国立歌劇場に移り、現在に至っている。そのオペラ・レパートリーは80にも及び、なかでもリヒャルト・シュトラウスの「インターメッツォ」や「カプリッチョ」などが知られ、1965年アメリカで上演して好評を博した。

**Schick, Tristan** シック

ミュンヘン生まれで、同地およびザルツブルクで音楽大学を卒業した。はじめピアニストとして放送局の伴奏者として働いたが、のちにマインツ歌劇場の副指揮者になった。1962年、ヴァイスバーデン国立歌劇場指揮者になり、1984年にゲルトナーブラッツの指揮者兼副監督に就任した。オペラのほかコンサートでもベルリン交響楽団の客演指揮者を勤める。

**Stolz, Robert** シュトルツ

1880年グラーツで生まれ、父親が教授を勤める同市の音楽院で学んだ。しかし、父は彼をベルリンに送り、そこでフンパーディンクの個人教授を受けさせた。1898年、シュトルツ18歳の時、グラーツ市立劇場の練習指揮者となった。その後、マールブルク、ザルツブルク、ブリュ

ンなどで研鑽を重ね、1905年、25歳の時、アン・デア・ウィーン劇場で「メリー・ウイドウ」の副指揮者を勤めた。1910年、最初のオペレッタ「幸福の乙女 (Das Glücksmädel)」を作曲、ウィーンだけで700回も上演するという大ヒットを放った。そして以後は「ワルツの中の2つの心 (Zwei Herzen in Dreivierteltakt)」など、オペレッタ作曲家として世に出るに至った。ナチスのオーストリア併合により1938年パリに逃れ、第2次世界大戦勃発とともにアメリカに移った。戦後ウィーンに戻り、1975年ベルリンで亡くなった。ウィーン市立公園にはシュトラウス記念碑の近くにシュトルツの記念碑がある。シュトルツの指揮する多くの19世紀ウィーンオペレッタ、あるいはヨハン・シュトラウスのワルツやポルカの録音が残っている。

### Sängerin 女性歌手

**Fuchs, Gabriele** フックス

バイエルン生まれ。ザルツブルクのモーツァルテウムで音楽を学び、1969年、オペラとコンサートを修業し、成績優秀でメダルを得た。1969年から1972年、グラーツの歌劇場で歌った後、フランクフルトの歌劇場へ移った。以後バーゼルで客員となり、またこの間、ザルツブルク祝祭音楽祭のメンバーを1967-1975年勤めた。

**Gueden, Hilde** ギューデン

1917年、ハンガリー人の父とイタリア人の母との間に生まれた。ウィーン王立音楽院で学び、卒業後チューリヒ歌劇場でデビューした。1941年以後ミュンヘン、ウィーン、ローマの国立歌劇場に出演した。戦後も活躍を続け、欧州各地の他、1951-51年にはニューヨーク・メトロポリタン歌劇場で「リゴレット」や「フィガロの結婚」を歌った。父の影響か、ギューデンにはハンガリー・アクセントがあるようで、彼女の歌う「こうもり」のチャルダッシュ、とくにクラウス指揮の第2幕のそれは抜群で、筆者の好きなギューデンの歌である。

**Holliday, Melanie {I}** ホリデイ

**Holm, Renate {I}** ホルム

**Holzmayr, Sylvia(V)** ホルツマイヤー

生粋のウィーンっ子。声楽を学び、1966年、西ドイツでデビューした。ブレーメン、リュベック、ハンブルクの劇場を経て、1975年以来フォルクスオーパー専属となった。ヒルデーギューデンを彷彿とさせる優雅で気品の高い歌と舞台演技という評価を得ている。

**Irosch, Mirjana {I}** イーロッシュ

**Janowitz, Gundula {I}** ヤノヴィッツ

**Juster, Gabriella(V)** ユスター

ウィーン生まれ。1973-75年、フォルクスオーパの研修生となり、1975-77年、ライムント劇場でオペレッタ歌手として活躍した。1977年からフォルクスオーパーの専属となり、以後多くのオペレッタに出演しているソプラノである。

**Kales, Elisabeth (V){I}** カーレス

**Koller, Dagmar {I}** コラー

**Köth, Erika** ケート

1927年、ドイツ・ダルムシュタット生まれ。同地で声楽と演劇を学んだコロラチュラ・ソプラノで、1948年カイザースラウテン劇場、カルルスルーエの劇場、さらに1953年からミュンヘンとウィーンの国立歌劇場に属している。また、その後ベルリン・ドイツ・オペラ劇場でも歌っている。オペレッタでは「こうもり」のアデーレなどが得意である。かつて「こうもり」でアデーレが歌う“侯爵さま”（第2幕）と“小リスのように愛らしく”（第3幕）を入れたレコードが出版され、筆者はこれをすり切れるほど聴いた経験がある。この録音は彼女のコロラチュラ・ソプラノの美しさを堪能させてくれた。

#### Lipp, Wilma リップ

1925年、ウィーン生まれで、同地音楽院に学び、1943年にデビューし、1945年からウィーン国立歌劇場に所属、その間1953年までミュンヘン国立歌劇場でも勤めた。また、1948年以後、毎年のようにザルツブルク音楽祭で歌っている。「こうもり」のアデーレのような準主役に達者な歌と演技を示す名ソプラノである。来日したこともある。

#### Litz, Gisela リッツ

ドイツのハンブルクで生まれ、バノヴァーとケルンで育った優れたメッツォソプラノである。ベルリン音楽院で声楽を学び、ヴィースバデン歌劇場でデビューしたが、ハンブルク国立歌劇場に招かれた。その後は、ミュンヘン、ザルツブルク、バイロイト、ベルリン、コペンハーゲンなどの音楽祭にたびたび招かれて歌った。彼女の特長はオペラの少年役で、「薔薇の騎士」のオクタヴィアン、「フィガロの結婚」のケルビーノ、「ジプシー男爵」のツイブラ、あるいは「こうもり」のオルロフスキーなどが当たり役である。

#### Martikke, Sigrid (V) マルティッケ

旧東独マグデブルク生まれ。声楽を学び、1962年東ベルリンでデビューし、西に移った後ウィーズバーデン、グラーツを経て1972年フォルクスオーパーで「マリッツァ伯爵夫人」を演じ、大好評を博し、以来同劇場専属となった。オペレッタのみならず、「薔薇の騎士」などのオペラでも活躍し、高い評価を得ている。

#### Löwinger, Guggi (V) レーヴィンガー

生粋のウィーンっ子。声楽、演劇、舞踊を習い、20歳の時にフォルクスオーパーの「伯爵夫人マリッツァ」でデビューし、1961年にウィーン四の「最優秀新人賞」を受賞した。多くのオペレッタで軽快な役を美しいソプラノとして重用され、活躍中である。

#### Radek, Johanta (V) ラデーク

ポーランド生まれ。ワルシャワ音楽大学でフルートを学んだが、声楽に転向し、ワルシャワのショパン・アカデミーの声楽科と演劇科を1981年に卒業し、1983年ウィーン・フォルクスオーパーで「魔笛」のパミーナでデビューし、同劇場専属となった。以後、多くのオペラ、オペレッタで主役を歌い、活躍中である。

#### Rothenberger, Anneliese ローテンベルガー

1924年、ドイツのマンハイム生まれで、マンハイム音楽院で声楽を学んだが、はじめ演劇に興味があり、舞台では演劇でデビューした。ハンブルクに移り、歌の勉強を続け、コブレンツではモーツァルトのアリアを歌い大成功を納めた。しかし、ハンブルク国立歌劇場と契約し、

現代歌劇を歌ったが、デュッセルドルフのライン・ドイツ歌劇場に移り、ザルツブルク音楽祭、エジンバラ音楽祭などに常時出演するようになった。1960年にはザルツブルク音楽祭においてカラヤン指揮の「薔薇の騎士」でゾフィーを歌い、美しい姿、歌唱、演技は聴衆を魅了し、彼女の名声は確固たるものになった。このオペラは映画、レコード、レーザーディスクに記録され、シュヴァルツコップの元帥夫人と共にその美しい歌唱と姿に接することができる。このほか、「こうもり」のロザリンデや、ツェラーの「小鳥売り」など、オペレッタでも素晴らしい声を聴かせてくれる。

#### Schwarzkopf, Elisabeth シュヴァルツコップ

1915年、ドイツ人の両親のもとにポーランドで生まれた。ベルリン高等音楽院で学んだのち、1938年ベルリン市立歌劇場でデビューした。1942年からウィーン国立歌劇場に移ったが、戦後の活躍はとくに目覚ましく、1948年以後、ウィーンのほか、ミラノ・スカラ座、バイロイト音楽祭、ヴェネチア、シガゴ、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場、などに招かれ、今世紀最高のソプラノであると評価されている。1972年、ベルギーのブリュッセルでシュトラウスの「薔薇の騎士」で元帥夫人を歌い、これを最後にして現役を退いた。ローテンベルガーとともにザルツブルク音楽祭でカラヤン指揮のもとに「薔薇の騎士」の元帥夫人を歌ったシュヴァルツコップは最高の歌と演技であった。彼女はまた、ドイツ・リートや宗教音楽でも名歌手として絶賛を浴びており、その艶麗な姿と精妙な美しい歌唱は類を見ないほどである。

#### Steinsky, Ulrike (V) シュタインスキー

ウィーン生まれ。ウィーン市立音楽学校オペラ科で学び、1982年からフォルクスオーパー、国立劇場、バイエルン国立劇場、チューリヒ歌劇場、フランクフルト歌劇場などのほか、ケルン・フィルハーモニーで歌い、現在も活躍中である。「魔笛」の夜の女王などオペラのほか、フォルクスオーパでは多くのオペレッタに出演し、その美しい声を聞かせてくれる。

#### Streich, Rita シュトライヒ

1920年、ロシア中南部のカザフスタンに近いバルナウル (Barnaul) で生まれた。母はロシア人であったが、父は東プロシヤ人だったので、彼女の国籍はドイツである。幼時にドイツに移り、イエナで高等学校を卒業、ドイツでコロラチューラ・ソプラノとしてもっとも正統な声楽をベルリンで学んだ。1943年にチェコスロヴァキアで「ナクソス島のアリアドネ」のツェルビネッタを歌ってデビューし、戦後はベルリン国立歌劇場で「ホフマン物語」や「後宮からの逃走」、「ドン・ジョヴァンニ」などで非常な好評を博した。1950年以降西側に移り、ベルリン市立歌劇場で多くのオペラを歌い、とくに「魔笛」の夜の女王で大成功を納めた。1953年にはウィーン国立歌劇場と契約し、1954年にはザルツブルク音楽祭でフルトヴェングラー最後の指揮による「魔弾の射手」に出演してエンヒェンを歌い、またローマでは「薔薇の騎士」でゾフィーを歌った。澄んだ美しい声の持ち主で、彼女の歌う歌曲、オペラ、オペレッタのアリア、民謡などを集めた「リタ・シュトライヒの芸術」としてドイツ・グラモフォンからCD全集が出されている。

#### Steiner, Elisabeth シュタイナー

ベルリンで生まれ、育つ。当地の音楽学校で、はじめピアノを志したが、後に声楽を学んだ。

大学の最終学年ですでにベルリン国立ドイツ・オペラ劇場でデビューした。翌年、ハンブルク  
のオペラ・アンサンブルのメンバーとなり、現在に至っている。歌曲、とくにシューマンとブ  
ラームスを得意とするメゾソプラノであるが、オペラでは「フィガロの結婚」のケルビーノ、  
「薔薇の騎士」のオクタヴィアン、そして「カルメン」のカルメンが当たり役である。欧州各  
地に招かれ、また近年はテレビ映画で「天国と地獄」などに出演している。

### Sänger 男性歌手

#### **Anheisser, Wolfgang** アンハイサー

ドイツに生まれ、オペラ歌手だった母に音楽の手ほどきを受け、フライブルク音楽大学を卒  
業した。その後、南アフリカへ赴き、文学を学んだ後、1961年、ドイツへ帰り、バイエルン国  
立歌劇場と契約した。その後、ケルン、さらに東ベルリンへ行き、ロッシーニの「セヴィリア  
の理髪師」でフィガロを歌って高い評価を得た。オペラのほか、「ジプシー男爵」のオトカー、  
シュトラウスの「ワルツの夢」などを得意としている。

#### **Berry, Walter** ベリー

1929年ウィーン生まれ。1953年フォルクスオーパーと契約した後、1955年国立劇場へ移り、  
「ドン・ジョヴァンニ」などを歌った。また、ワーグナーも得意とし、バイロイト音楽祭にも  
出演している。リヒャルト・シュトラウスも得意なレパートリーである。これらのオペラのほ  
か、オペレッタでも「こうもり」のアイゼンシュタインを当たり役の一つとしている。

#### **Böhme, Kurt** ベーメ

ドイツ、ドレスデン出身。同地のコンサーヴァトリウムで学び、1930-49年、ドレスデン国  
立歌劇場でバス歌手として活躍した。どちらかという喜劇役を得意としている。1950年以後、  
バイエルン国立歌劇場に移り、さらに1955年からウィーン国立歌劇場で活躍中である。ザルツ  
ブルク、バイロイトあるいはニューヨークなどに招かれているが、とくに「薔薇の騎士」のオ  
ックス男爵などで名声を得ている。

#### **Brendel, Wolfgang** ブレンデル

ミュンヘン生まれ。ヴァースバーデンで学んだ後、ミュンヘン国立歌劇場アンサンブルに参  
加し、ここでおよそすべての叙情的な役、例えば「魔笛」のパパゲーノ、「ドン・ジョヴァン  
ニ」、「セヴィリアの理髪師」、「椿姫」のジェルモンなどを歌った。また、ヨーロッパ各地に招  
かれ、チューリヒで「エフゲニ・オネーギン」を歌い、1975年にはニューヨーク・メトロポリ  
タン歌劇場で「フィガロの結婚」に出演した。そのほか、「タンホイザー」なども得意とし、  
近年はテレビにも出演している。

#### **Brokmeier, Willi** ブロクマイヤー

ドイツ、ドルトムントに近いウィッテンに生まれ、ドルトムントの州立コンセルヴァトール  
で学んだ。マイントの劇場でデビューし、のちにデュッセルドルフのドイツ・ライン劇場、そ  
してミュンヘンのゲルトナープラッツ劇場やケルン歌劇場、そして最後にバイエルン国立歌劇  
場に所属した。美しい声のリリック・デナーとして実績を重ねてきた。

#### **Dallapozza, Adolf (V)** {I} ダラポッツァ

**Dönch, Karl(V){I}** デンヒ

**Fischer-Dieskau, Dietrich** フィッシャーディースカウ

今世紀最大のバリトン歌手と評価され、そのドイツ・リートはゲルハルト・ヒッシュュ以来と言われる。1925年ベルリン生まれ、ベルリン音楽大学で声楽を学んだ。第2次世界大戦に出征し、イタリアで捕虜生活を送った。1947年、フライブルクでブラームスの「ドイツ・レクイエム」を歌ってデビューし、1948年からベルリン市立劇場で活躍を開始、リートとオペラの両面でバリトンの第一人者として活躍している。日本にも度々来演している。

**Forstner, Josef {I}** フォルストナー

**Gedda, Nicolai** ゲッダ

1925年スウェーデンのストックホルムで、スウェーデン人の母とロシア人の父との間に生まれた。幼時をライプチヒで過ごした後、スウェーデンに帰り、銀行に勤めながら声楽を学び、1951年、ストックホルム王立歌劇場でデビューした。1953年にはミラノ・スカラ座でカラヤン指揮の「ドン・ジョヴァンニ」に出演、その名は世界に知られるようになった。その後、ロンドンのコヴェントガーデンやニューヨーク・メトロポリタン歌劇場でカラヤンと出演し、またザルツブルク音楽祭でも歌った。ゲッダは音楽的知性、音楽的順応性に富み、外国なまりがなく、多くの言語を話すことが出来る。彼は広いレパートリーを持ち、多くのオペラ、オペレッタで歌い、世界でも代表的なバリトン・テナーとして知られる。

**Gränzer, Robert {I}** グレンツァー

**Gruber, Ferry** グルーバー

1926年ウィーン生まれ。ウィーン音楽アカデミーで指揮を学んだのち、声楽に転じ、1950年、スイスのルツェルンにおいて「魔笛」のタミーノでデビューした。その後、バーゼル市立劇場に属した後、ミュンヘンのバイエルン国立歌劇場とゲルトナープラッツ劇場を本拠にして活躍している。ウィーンなど各地でオペラ、オペレッタに活躍している。バイエルン国立劇場から宮廷歌手の称号を贈られている。

**Hirte, Klaus** ヒルテ

ベルリンに生まれた。軍務についたため彼の音楽経歴は著しく遅れた。その声楽の才能を認められ、ヴェルテンベルク国立歌劇場と契約した。数年間、端役を務めた後、「マイスタージンガー」を歌い、認められ、バイロイトやパリでもオペラを歌うようになった。現在は広く世界各地に招待されて歌う有数のバリトンである。

**Huemer, Kurt (V)** ヒューマー

リンツで生まれ、はじめウィーン大学でドイツ文学を学んだ。脚本を書いたり、演劇を学んだりのち声楽に転じ、ニュールンベルク、ザルツブルクなどで研鑽を重ね、1973年以来、ウィーン・フォルクスオーパーに所属、活躍をしている。オペレッタのほかミュージカルなどでも活動している。

**Krämer, Hans {I}** クレンマー

**Kunz, Erich** クンツ

1909年生まれの生粋のウィーンっ子である。声楽を学び、「後宮の誘拐」でデビューした。

1940年以來ウィーン国立歌劇場に所属し、1942年、ザルツブルクで「フィガロの結婚」のフィガロを歌った。戦後も各地に招かれて「ホフマン物語」、「薔薇の騎士」、「こうもり」などで歌い、歌だけでなく演技でも素晴らしい才能を発揮した。クントツはオペラやオペレッタだけでなく、ウィーンの小唄（Wiener Lieder）で素晴らしい声を聴かせてくれる。多くのレコードやCDによってその親しみやすい、本格的なウィーン情緒を楽しむことができる。

**Kusch, Benno** クッシュ

1916年、ドイツ、フライブルクに生まれる。カルルスルーエのバーデン国立歌劇場アカデミーで学び、1939年、ハイデルベルクでデビューしたバリトン。戦後ミュンヘン国立歌劇場に招かれ、以後ミュンヘンを中心に活躍している。1951年、ロンドンでワーグナーの「マイスタージンガー」を歌い、その名歌唱が絶賛され、最高の評価を得た。「魔笛」のパパゲーノや「薔薇の騎士」のファニナルなどを得意とする。

**Minich, Peter {I}** ミニヒ

**Prey, Hermann** プライ

1929年ベルリンに生まれ、ベルリン音楽大学で学ぶ。1952年にヴィースバーデン歌劇場でペーターヴェンの「フィデリオ」でデビューした。同年、ベルリンで開かれた声楽コンクールにおいて2800人中第1位を獲得し、賞としてニューヨークのカーネギー・ホールで歌い大喝采を得た。1953年、ハンブルク国立歌劇場、1956年、ウィーン国立歌劇場で常任客演をする。さらに1960年、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場でワーグナーを歌い、1962年にはザルツブルク音楽祭に参加、1968年には同音楽祭りでロッシーニの「セヴィリアの理髪師」でフィガロを歌うなど、活躍を続けた。このほか、ワーグナー、モーツァルトの「フィガロの結婚」、「コシファン・トゥッテ」、「ドン・ジョヴァンニ」、「魔笛」など幅広い歌唱活動を続けた。その独特の幅のあるバリトンは歌劇のみならず、オペレッタやリートにまでレパートリーが拡がり、当代随一の名歌手として世界の人気を集めている。1982年以來ハンブルク音楽大学教授。

**Ruzicka, Kurt (V)** ルツィカ

ウィーン生まれ。ウィーン音楽芸術大学で声楽を学んだ後、リンツ、ヴィースバーデンの歌劇場と契約した。1967年からフォルクスオーパー専属となり、「天国と地獄」、「乞食学生」など多くのオペレッタで歌い、活躍している。

**Schock, Rudolf** ショック

1915年ドイツ生まれ。独学で音楽を学んだという。1936年、バイロイト祝祭合唱団のメンバーとして歌ったが、1937年からブラウンシュヴァイク歌劇場、1943年にはベルリン・ドイツ歌劇場、1945年からハノーヴァー歌劇場で活躍した。そして戦後の1946年からはベルリン国立歌劇場、ミュンヘン歌劇場の専属となった。「メリー・ウイドウ」のダニロなど2枚目役を得意としている。

**Serafin, Harald {I}** セラフィン

**Skovhus, Boje (V)** スコフユース

デンマーク生まれ。コペンハーゲンでオペラを学び、1988年、ウィーン・フォルクスオーパーと契約し、「ドン・ジョヴァンニ」でデビューした。以後、「コシ・ファン・トゥッテ」、「魔

笛」あるいは「メリー・ウイドウ」などで歌い、活躍中である。

**Wächter, Eberhard** ヴェヒター

1929年、ウィーン生まれ。1953年、フォルクスオーパーと契約した後、1955年、国立劇場へ移り、「ドン・ジョヴァンニ」などを歌った。また、ワーグナーも得意とし、バイロイト音楽祭にも出演している。リヒャルト・シュトラウスも得意なレパートリーである。これらのオペラのほか、オペレッタでも「こうもり」のアイゼンシュタインが当たり役の一つである。息子もオペレッタ歌手としてフォルクスオーパーで歌っている。

**Wasserlof, Rudolf (V){1}** ワッサーローフ

**Zednik, Heinz** ツェドニク

ウィーン生まれ。ウィーン・コンサーヴァトリウムで声楽を学び、グラーツでデビューした。1965年にウィーン国立歌劇場に入り、以後同歌劇場で活躍している。1970年以後はバイロイト祝祭歌劇のメンバーにも選ばれ、さらに欧州各地、アメリカにも招かれ、オペラ、オペレッタに出演、高い評価を得ているテナーである。